菅沼
菅谷
菅浪

畧譜 火

共七

内閣文庫	
番號	和 36088
冊數	211(204)
函號	156 17

親氏君御代

菅沼 丹波 [illegible]

源姓　　　　二百七十石

家紋 六ツ打抜ニ三ツ打抜キ 桔梗 沼之字

源頼光之後胤浅井ニ住ス今丹波之祖次郎左衛門之家

次男小次郎資長ハ三河國設楽郡野田ニ住ス

富永之庫助信資ハ親族なるに依テ信資嫡子

富資ハ子無之連枝子なれハ小次郎資長を

招養子とす　同国同郡菅沼ニ住ス

菅沼九郎左衛門忠通ニ至リ男子一女ありけれハ

記録御用所

信濃貞ハ附関しく済貞長を嫌ひしの大道
の家督ハ継しか菅原伊賀守貞長と
改め姓ハ敵のごとく支流を始祖とす云
親氏君ニ別酒井與左衛門の宅ニ御滞留
中近清水源為といふ者家来にて
御連歌の時忠道ニ列す仍て又
親氏君の御系譜を同流也家の忠深く
貞長ニ命し候て
親氏君ニ帰附世帰郷ハ依酒田家臣

一説ニハ
伊賀守貞長ハ信濃守宗直といふ
こそ昔しの浪人なりしといふ説
家紋打出ハ伊賀守貞長勤番として
上京の時貞長の筆力
叡聞ニ達し門葉に加へらるゝ其
貞長招かれて大打出を拝領
叡感斜ならず打枝と家紋に附し候
お侍く家紋と成嫡流ハ打枝ニまつ者

廣瀬ハ角違又ハ丸の内或ハ形を描く
つくるなり
菅沼伊賀守資長嫡子

伊賀守

定成

三河国にて生る 文明七年十月廿六日
死

貞行

伊賀守

此家ハ嫡流にして満岡世菅沼と嫡子孫
断絶

定信

刑部少輔

初て三州田峯の城を築く

定忠

大照院 称往心月妙

生平詳ならず

定広

新之丞 大照院

生平詳ならず定広より七代目の由

家断絶し後代田峯の菅沼となる

定則

竹代 新八郎 織部正

入道不春

三河田峯の城主同国野田の城主

富永兵庫頭か養子となり続姓氏あて

初めは〃〃野田の城に移る定則の父

野田菅沼の元祖なり○永禄二年

家康君三河八名郡宇利城主熊谷備後守

追伐の比定則先陣と〃う

けるまゝり切られしが此名を惜しみけるにや山の
古用に宇利の郷を領して子孫代々領
知す 此時宇利城の主は熊谷氏にて其の後 清康に属し信盛の時に至り志を通じけり 隣の落城せしかとも 帰参して所領を賜りけり 同年六月廿八日今橋乃
城主牧野田三信成と戦ひ落城の時定
則も戦場に於て山家三方 築手 田峯 作手 長篠
設楽西郷二連木伊奈等の人々も定則
に従ひ
清康君の麾下に属し其後家○えた隠居

判官を〇天文 年不知 二月十四日死葬地
詳ならず

定村

竹千代 新八郎 織部正

野田城主にて菅沼定則の子也天文
の末三河山家三方の族今川義元に背
事ありし時弘治二年八月奥平監物
貞勝と相模の郷の三河宝飯郡西山城主

奥平修理定良籠城をとりまき候義之
同人とともに定村ハ攻らる定村戦ひ
て卯の上乙年とやかてより定良の中にて太刀ヲ
ハ先ず中にて討死す此時貴定並定満も
一所にて討死せりと伝ふ弘治二年十月七日
なり定村ハ宇土の菜野田道雲寺に葬

定貴

新左衛門

三河宇利城に居たりしか上宮にて見え

云に討死

定園

三平衛

定自

佐九郎

定満

半太郎

三河山吉田の城にて兄とともに討死

子孫家人となれり

定在

初三河国寺津院住職
頼圓と号す還俗して宥房と
いふ

某

又左衛門

定盛

行氏代新八郎 鐵砲組
従五位下

三河国幡豆郡寺津の城主にして永禄四年今川家より
離れて東照宮へ帰し参州の城を守りて御信任を蒙りしか
同年四月十一日定盛
東照宮へ属し奉り御信任を蒙り殊に
定盛か領分は関東の地をたまわりて武蔵
より岩槻雉楽助氏定と改めて
定盛の家臣岩槻小四郎は雉楽助氏
定の弟なりしを旗本に召抱へられ退
く氏定は武蔵国へ行りて代々職をつとめ候へ

しかりハ田峯の菅沼小法師設楽
越中守貞通長篠の菅沼左衛門尉
貞景弟弾正正勝（式部少輔将監）入道等
東照宮へ属す此時御所殿文を
御入（此方今川家の被官なりし）同年九月下旬今川方
吉田の城主大原肥前守資良大将として
牛久保二連木伊奈本郷之
勢の士卒をもよほして野田城を攻む
定盈も籠城の用意として西郷弾正左衛門

正勝ハ原ハ縁者なれハ子息孫九郎元正
を出し二流か先として設楽伊賀の忠者ら
二所より是に作れハ其旨を東照宮へ申し
しかし敵軍夜中に御旗へ忍入城中の
士卒切しかは拒戦而曲輪を退へ追出せり
それより敵方より扱を入けれハ城を出西郷へ
立退ける城ハ菅沼構ハ預りける
正勝ハ中山の営山に居城を又今川方
牧野出羽守同右馬允貞成先陣小

ゝ攻來りしハ正勝父子定盛共におゐて
拒戦ハ牛久保牧野の士卒ことに退し
かく敵数多討取るといへとも味方勝利
を得すして此時正勝か男喜八郎討死す○同
年
東照宮牛久保城主牧野右馬允
を責させ給ふ故定盛出て降す其家臣某
兼て定盛ハ永禄九年正月二日定盛
岩瀬城より今川の出丸を焼初め渡瀬
初意府の列に達し以後毎度戦ひつれとも
同年十一月定盛野田の舊城にて菅沼の謀
叛を企ける時こそ以て明らかを請示すし今
川の一家臣鵜殿六郎氏定進退ハかり兼て
の縁に據て籠りしハ大宗肥前守と云の
今川勢をたのみしく鵜殿を攻て乱
橋を傳へ同年十二月二日戦中にて敵両の
城に籠る今川勢ハ攻落し再野田城
を取し所にて此時牧野の郎從堀垣

此時ハ氏俊も討死敵兵死傷多し○同
年七月廿六日西郷の城主西郷弾正尉
入道並男孫九郎元正父子を今川勢責
て落城す此時ハ父子共討死し末男孫
六郎清貞歎き擒ニ成り野田へ逃来
しに清貞ハ定盈の従弟なれハ
東照宮へ申て西郷の跡を継せ清貞ハ小笠原ハ
当国の古要の城を築て居住せり○其後
今川氏真武田信玄と戦ひ三州一宮の城

を囲る百助信保を攻めしむ
東照宮御出馬ありて定盈及び左近清貞
を従へ給ひ御働して戦功ありし○永禄七
年大原肥前守資良か籠りし吉田の
城攻
東照宮攻させ給ふ時定盈酒井忠次
のもとに加り軍功ありて後和を乞
資良吉田を去り退く○永禄十一年
東照宮定盈ハ氏真を攻野田ハ其之支配

の境なり遠州に打入へしとの御計畧の趣
し是より三河の軍ハ定盈城に帰り
家人小山源三郎をして後藤覚入斎
方へ
東照宮ゟ御書を下さされ右の由仰含ら
るし而此時甲州武田信玄に志を通し
居る故ハ菅沼の三河衆と井伊谷
の領ハ此ち家臣七人のうち都田の菅
沼次郎右衛門忠久ハ定盈一家なり

故に家臣今泉四郎兵衛請定候なれく
此人をして遠州打入の事を以て忠久
井伊谷の近藤石見守康用鈴木
三郎大夫重時と相議して事
調ひし定盈ち此度を
東照宮より永禄十一年十二月十二日の
御書を御感なりて遠州河井三ヶ郷
并ニ新知數ヶ所宛行ハる御判文にも
わたらせらる定盈相頒ち山吉田郷をも又

注のちにはさきに定勝をとゞめて御旗本同
そのほか御證文ならびに定盈旗本同じ
定勝加判して三千貫を遺る　甚太郎兼て菅沼と名のる
野田を守り大将なり　又三千の旗本同じく伊賀をとゞむ
東照宮の御出陣を待ちて小定盈は自ら
の宇利まで懸をさしはさみて陣地まで
待請奉りて
東照宮岡崎より御出陣牛久保へ
賀茂へ御出馬あり宇利小幡まで御出陣

ゆり
東照宮定盈が忠節を感じ給ひ去る刑部退
治の先陣は定盈に仰らる　井伊谷三人衆
をも
東照宮初めて宇利に陣し給ふ
東照宮此所より浜名の城主大沢浜名
陣を堀江へ移し給ふ時は退治の
給ふの時は定盈鉄炮を放ち
をもちて定盈の人数を退治

こゝにしも又後花園院の義ハ
東照宮中宮利御 御出陣とゆふ事に京都
絶ゆる後花園院に渡御ありて御悦ひありて勅使
元和坂本寺平山城ニ中宮利よりも
今泉寺并之清延院の縁
東照宮ニ属し奉るへき旨窺ひ請合ひし由
宝篋山ニ御上洛御許容ありて勅諚
後花園院ニ御預かりありて宝篋山
附属せられ是より円光寺にて御座
是ハ元和六年之頃 関ヶ原御陣之頃の

此後も宝篋山書を勅作に 柳営御ニ預ゆるよしにて 井伊谷の城主次郎法師
之にて宝篋山出火ありて井伊谷の櫓上
城ハ東照宮ニ攻落す夫より刑部ハ城主地
向ひ又宝篋山一番ニ攻落す家人
貴治又左衛門 宝篋山 合戦 城攻落せる所の
者なれ共宝篋山ハ焼払ひ残りき
酒井左衛門尉忠次宮寺山にて後白須
加賀城を落し宇津山城主大原紀伊守
資良殺害へ逃走之後酒井左衛門尉

ゝ御使加之利幼様ハ大坂へ返す
東照宮又利幼殿様の事ハ成瀬古御蔵
斜らす丈より今指道衆戸川五郎
謂和の好田宮ハ御先陣せよ飯尾遠
能家臣江間安藝守ハ江間加賀守隠れ
を守てもしの安藝守ハ甲州ニ志を通
しかハかゞ守ハ
神君又御聞し陣ニ御召服出
普海寺までかゝハかゞ守ハ拔く

出陣し安藝守ハ戦ハず加賀守を討たんと安藝
守も又加賀守の命に従て付て城堤を剣を交
以落城ニ及時ニ剣の主切石家臣定
盈ハ軍切行のもつて陰を使縁小笠原、
天作ら中泉東宮女の陰ある時へ
証法
東照宮又を拒事進ミ而合在当清負とらん
向ら来ハりかへハく戦利行てす大須賀
又郎左衛門康高奮激し一番ニ河を渡

吉兵衛ハ軍切仕候由宝暦候ハヽ川
を渡し鉄炮ニ而討候ちこの後軍
手ニ而追込候事ハ其事すの○元禄十二年
正月吉田掛川ニ而討留候由同姓久野城
主久野三郎左衛門家臣
東照宮様ニ而三族之家臣法名ニ而同様
正月吉田来女今川方ニ而同道し久野城を奪
いかし候ニ付久野ハ宗重と共ニ其の絆の
隠謀と三郎左衛門ニ而追而也し候ニ其余を

東照宮ハ今ニ而其後ニ而久野城の
加番として宝暦被ハ松平與三郎
殿江極村若狭守家臣之宅兵右衛門廉
貞宗本城ニ籠らる　書看ノ　七日
鎗川酒井の合戦ニ吉兵衛ハ其ノ戦ハ
家人菅沼治左衛門後漏柄今泉兼助同
孫三郎後七郎左衛門同久左衛門吉坂小作殘
を合せ鐵砲四大炮ニ而家人ハ軍切仕
不今　書き加　然ニ場ニ而陳を攻の事附

走入玉ふ軍功により実名盛信と給ふ今川
を離し敵将等討取依之の後軍
をもとして滅亡す○永禄十二年
正月遠江掛川へ御出馬有りて同国久野城
主久野三郎左衛門宗能家臣
東照宮御感ありて一族之輩謀叛者同国
正同来女今川方ニ同道し久野城を奪
はんとせし謀し小久野宗能と宗能の弟の
佐渡謀と三郎左衛門宗能ニ讒言せしかは上意を

東照宮之を見玉ひておかせられし久野城の
加番として定盛及び松平與一郎
忠正植村出羽守家政ニ宅(?)抱(?)守らしむ
自宗本城　同年二月七日
懸川籠城の兵錢をもとんへるにて戦ひ
家人菅沼次郎右衛門(後漏(?)柄(?))今泉喜助同
孫三郎(後號大膳)同久左衛門長坂小作綾(?)
と合戦の間大ニこれを家人ニ軍功あり
同年二月十九日堀川城を攻め玉ふ時

此日の同村源右衛門書寫をとうへらまき
寳藏發向して事仰何の○天文
元年六月夫人何婦門御律よして病故て
御律をも家人今泉宗三郎正信よ
云士の署名と之人酒井右衛門尉に加り
訳殺さへらりき○同二年七月甲州の
枯山御番として晴近東に河の出浅田家
の菅沼刑部築山の奥平両飛騨甲
州方へ属し　夫より設楽郷

行廣ハ敗出しふより寳藏并設楽
郷御油池田信ゝ枯山門退て此時長篠
の菅沼新九郎正貞も甲州方に属せしか
枯山より寳藏も甲州に属とへきよし申来
ましも三之使を對面せしか来て遂に返事也○
于時後田峯の菅沼小大膳宗利寳藏
を憑む
東照宮の御威二方の東の公哉の時
武田勝頼刑部城を攻落その村の地在也

いまた弐年し天正元年正月信長
刑部の勢を率て定盈居城に到り野
田の城をせむ城中は副将として設
楽越中守貞通松平与市郎忠正を
籠らる此時
東照宮御自身の御書翰を定盈に給
ふて七日の間守禦堅固あるへきと仰
ありける
東照宮より小栗大六重常を織田信長へ

遣さる野田の後詰ありと告させ給ふ信長は
敵多きゆへ大に信長は敷勢なりし此時
城を家へ殿ハ去年を正しく会合して家
人菅沼駒之助菅沼摘漏を居ゑ置たる
城許へ御帰ありて名も定盈を後詰厳重に城
をも固柵木行来結構を構へ城兵の気
をかひ信玄ハ長銚のかし南吹の在年
とらへ来人陣を出て小屋を造り長陣の
用意ありて軍衛御物ハ旅立陣の上手陣を

も勝利を得曲淵信豊も高名をとけらる城攻
にも一夜の内落城せり城中よりも又宗兵衛自
諸卒を下知し城門ハ破れ要害も崩れ尽き
となりける

東照宮ハ信玄のよし駿府を出浜松へ
陣をうつし給ふ御出陣の時節をはかり馬を
色々に中家に京綱といふ者を遣りて
謀の伏兵を高松山に籠め五国にて安く人
討取るの勢ひを以て押通つゝ

終に討死をとけらる又城中より鳥居強右衛門
勝商といふもの唯一騎忍ひて城をぬけ出て浜
松へ参着し御後詰の事申上しかは速に
御承引ありて小田信長卿へ軍勢を乞ひ
然れは笠取山に狼火を挙て城中へ
知らせ

東照宮ハ野田の後詰として八幡村の上笠
取山へ御出馬ありけれとも山縣三
郎兵衛昌景ハ大軍を率ゐて向ひ来る

十二日吉田城へ押せらるゝに元より堅固の城の
照山へ引籠りて御出馬有とも不叶
籠城の御覚悟
東照宮より石川の大筒鉄炮数挺並鉄砲家人
召し出しに載せて打放つ敵
狭く希有の鉄炮なり一統せんとも
みしゆへ城中塀櫓の上まてうちあけしに
信玄公其程て程郷の浦織を
左右に得る事を敵の方より金掘を入

武田西方の櫓塀を鉄炮にて打ちかけ城
中に放入されは城兵昔戯も退く
又其文東本陣の方へ金掘を入城中の
井水を掘ぬれは渇水にかへらの時城兵壮
強の若者まて敵に向て叫しは是程の
小城に強き多勢をたのみ尊々に掘出せと
用水を留しは義ならす信玄にも似
合はぬ事なりとあさけりて敵軍
是を聞てやかて退て城中の

人数を固たり城之継手能なりしかとも
人と言しつへきとも毎日一人つゝ水之櫓へ
送りけるを勢州山田の住人村松
芳休といふ鉄炮の名人野田へ来り籠城
し毎夜筒を放しけるに敵方よりも城西へ
近寄る信玄公のしは二月九日夜右之に
例の毎夜敵の者一ト間計鉄炮を放ち
けれは謙信陣を動て時信玄鉄炮に中り
しといふ説ありて家人今泉同郎

之情方へ矢文を射入和義を申入宝盈文
統満寺より信を入る城中渇水法華
経義に及ハ法華義を城を渡さるへき旨
ことハ宝盈切腹して送り文謙信山
田之方よりも杉山村の勧福寺より信
をいへて和義を申遣候へ和義調ハ宝
盈出城し法華を殺し信玄宝盈を
山田之方と鉄竜城の城内にて信玄城
を請つる杉目持明しハ菅沼新八郎と

尋候次第右之通りにて常宗ハ行宝盛を
我か舎せしめしと迷て申さるゝといへとも
宝盛未さらす山家之方の案
東照宮へ対し奉る人質に宝盛を替ん
事を信玄に申入けり信玄より浅井を
東照宮へ申成ハ浜松宮に行て東村の内
廣瀬といふ所にて双方人数を出し人質を
二方の人質に宝盛を替させらる信玄
野田を退陣路より鳳来寺へ来陣也

罷の上にて信玄命拾せしまゝ山本
其夜鉄炮の疵出といへり翌日申より三州
田口村福田寺にて数日逗留彼疵の
不癒にして病悪しく気力次第に衰
病む同月十二日[illegible]死去甲府帰陣の時
新城と称するに行り是信玄の死骸といふ
宝盛ハ両[illegible]飯田條村塚の内といふ所へ立
退然を援へ居候しく故のごとく
東照宮へ仕ふ〇天正元年七月廿日

長篠城を攻めしより久間中山に附城を
築き酒井左衛門尉忠次松平上野介康忠ん
定盈を籠らしむ○同二年菅沼定盈野
田は先祖の居城なれは築き居しむ後
又是野田は山家三方の押の地なれは幸
ととも以来ても許容せしめ本領の儀は去
年落城の時焼失し今度の再興よ
つて猶は大野田のうち城所浄古斎の古
屋敷の要害の所なれは城を築き居住を

○同年武田勝頼濃州より帰陣の時同月
十五日三州へ出張足助城大沼田代浅谷
八桑木の城を攻落し是より定盈か浄古
斎の新城を攻むへしと
東照宮の御方へは武田典厩信豊にて高備
美濃守信房杉山伯耆守晴近保科弾
正松尾新左衛門に別てふみ向ひ定盈か
居城へは山縣三郎兵衛昌景小笠原掃部
大輔相木市兵衛なとを向け山家三方の

うち菱沼刑部少輔を案内者として忍寄四
月廿八日宵より仮山を立て夜中に
宇田へ押寄べし宮崎まちうけ攻寄る
けり仮山のうち宗通の松飯野郷村に
鞭打走り行宗通は殺打入りけれ敵軍を只今ぞ来る
陣中に来りて使者す親秋のまゝなれし
とや宗通の小刻あやしかりき敵軍たちまち迷ひ
浜田俊と云者和田兵庫守宮城二手に
分り押寄して隙に夜中なり家人宮定

宗通を誅して当国の要害にまかせ候はんとて
上意取しまるを出しし味方の人々にて敵
大軍なれば籠城覚束なければ退
立退て御方へ内通して誅ぜられ宗通人々取れ
せん敵の札を貌せしに山縁せん為にぞ
諏訪原左衛門傷をかうむり戦ひけれども
宗通も三方防戦して無理に関所に入道
を頼しは去年已に先ず又に寄る
足軽大将山上宗仮文物に利害ありし

法師ハ宗益ト共ニ當方ノ様ニ文所從者共ニ
法師ハ其所從人ヲ殿ニ定メ南曲輪
ヨリ門ヲ退テ途中ニテ宗益ト共ニ牢ノ
ムカヒ陣ニ至リ内ヘ通シモ知レスシテ自
身ハ城ニ帰リ寝室ニ火ヲカケ同氏桜
井ノ蒼鷹ヲ搦捕ントシ之ヲ縛シテ
所從者ヲ随ヘテ正ニ宗益ト中山與六ト共ニ
家臣従者八家ヨリ打出テ出會ヒ又國ヲ
急ギ渡リ出テ遂ニ打取リ城ニ帰リ

輪ヲ率テ蒼鷹ヲ振捕ヘ尋テ宗益ハ
甚閑ニ野田ノ彫ヲ越テ宗利毎ニ為ル人
門返テ年ハ宗益渡テ跡ヲ追海
金闘ヲ門返シ爾ニ諏訪後倉全助追延
来ルヲ打取付ケラレ又諏訪ハ毛利追
来ルハ此所ニテ討死ス味方ノ名士八名
井村中村彫戒ハ吉祥山ニ退テ爾
着後刑部少輔吉田ニ至リ吉祥山ニ
攻上テ東別勢共後ヲ打テ山ニ入所從

士卒四五人引具し後殿して素綱取
を渡り鍬田村より吉田山へ退かんと
する所を敵急に追懸けし中へ引返し歩行
まて山の麓にてさしき刑部家臣浅野
備中追詰来り候ハ討死と定め野田澤
左舟追合とりしハ敵軍諏訪民部少輔と名乗
多分其味方にも討死の家臣十七人有り
勝頼其より吉田二連来ハ御宮崎の方よ
甲州へ引入山縣三郎兵衛ハ

其後同人諏訪方の入口へ出大手川
清より宮島迄出合加勢防戦し
山縣衆軍するを諸實宮島迄追撃し風
来寺の合戦まてハ敵何まて討死
○天正三年五月武田勝頼長篠城を攻む
よつて二股より山の吉田通り今村にて勢
揃高山に陣取総軍ハ大通寺山
其外所々に陣取長篠の南一の宮ヶ巣
に河床を構へ武田兵庫信實人を大将とし

浪人組二千餘人君か伏戸波安ヶ濱ニ陣をとる
長篠城ニハ奥平九八郎信昌城をまもる松平
弥九郎景忠松平又七家嗣ハ和勢楯籠
織田信長
東照宮ハ加勢として野田原ニ在陣此時
野田の古城一隊ニ入行して宍盛を松らか、
くのかきこ要害も依ハ小城なくたて逢
信玄と門文鷹城落ハしく指揮し来
抜群の働なりしと甚常人頭ハ行り時ニ宍盛

酒井忠次ハ謀りて松山越の険路を越て鳶巣の
巣君の御手の勢陣容易に破るへきと指揮
略をいたしより忠次ハ謀を成し忠次ハ不
三河勢十余騎を鳶巣へ出て向ひ宍盛
菅沼をたしてまた陣をなし諸軍吉川
ヲも軍勢行を立て忠次ハ宍盛ともに出て軍
諸手をく吉川村ハ豊田藤助秀吉
遊撃ハ目見ゆる康関をたん濠ニ使ハ菅沼也
し無軍夜を侵し六郷余のありける

塚山より黄市の左右より寄手の棠若の伏
戸波安倍了籠いて歎と追落し
武田信玄家臣三枝勘解由左衛門并伊孫
四郎兵衛了保ち親之清名和泉守伊東
を討取敵軍敗北して退く亦極田
伊東法橋ニ至りへ
東照宮御所より急き来り伏兵を設
出張中の合戦通り相続き鉄炮を放
かけ崩し攻討し時城中の兵ハ本年

九八郎 松平源九郎 松平又七等寄り出
城の押なる彼源次郎 某家人相手に戦退散
寄手より追いて味方に乗りかけ内令
多ハ一ツ戦ひ大野の方よりまくり追返敵
数百人討取ぬ此時宅奥の家臣横田大
仏寄ニ在陣 寄手の軍勢ひよいく高名して又
大海村の方にて今泉長次郎 鈴木次大夫
沼田長左衛門ニ人にて敵人皆大坂金森
両将并家人ともを討取りし同年六月

其後小山城攻の時出陣を致し遂に
東照宮より上杉謙信へ使者を以て御念ころ
なる書をつかはしむ此時謙信より定盈へ
書を贈らる 八月朔日とこれ書を贈らる ○天正九年三月廿
二日遠江国高天神落城の時戦功有之により
家康公より指料太刀を賜ふ 岡田竹右衛門と云者を討とる ご首二級を
討取○同十年武田勝頼御退治の時
従軍す○同年甲州御入国の時定盈
計略をもつて諏訪安芸守頼忠を

御味方に属せしむ其後甲州御合戦
の時定盈北条氏直と戦ひ首級を得たり
家康公より賞せらる○同十二年三月九日定
盈小牧山の要害をまもり家康公若尾口勝利
羽田備中郷合戦の為安全あり かく
軍功あるゆへ御感状を賜ふ○同年十
月十六日小幡城を守衛す○天正十八
年小田原御陣に従ふ○同年関東
御国替の時武蔵国児玉郡阿保郷を賜ふ元

正をもつて野田正勝の名跡を継しむ
時に正勝わつかに十二歳なりし正勝に
千石を二千石上りしかは武蔵国新座に信
采知若干石余り以上列河保に所替仰
付らるこの時より家系大に滅し家人も
離散せしを当国太蔵牧野氏の成行と
いふ人公合邑子に指石を領せしか秀吉
子の婚つゝきに定盛子附せる 子孫相続して家絶
○年月 浮浪して定盛河保にて蟄居し嫡子新

八郎定次は家督をつく○関ケ原御陣
の時浪人の身なりしかは江戸の御前に出
○慶長九年七月十八日駿府にて病死
死去年三十同所にて葬る

某
　　丹助
　故あって遁塞す子孫なし

定次
　新八郎　志摩守
　従五位下

二万石野田城に住す○家康公東下ニ上州阿
保一万石を領○関の原御陣のまへ濃州
曽岡寺（城代伊[illegible]）（[illegible]） 府中（城代[illegible]）（[illegible]） 攻取
勤番御勝利の後濃州岐阜城勤番
此時城附の[illegible]筒武挺を領（[illegible]）○慶
長六年二月
東照宮の御前へ召され濃州から勢州
長嶋(?)先(?)知(?)不(?)の[illegible]
石領(?)[illegible]勢州長嶋
城弐万石を領し○同九年病気保
養のため上京して十月廿五日京都ニ而
死 二十[illegible]歳 勢州長嶋宗[illegible]寺ニ葬

定成
主膳(?)
紀伊頼宣卿へ召出さる

定芳
初定好
従五位下
向九(?)　左近　織部正　志摩守

三河野田城をたまハる○慶長九年
東照宮に初見え別にたまハる
台徳院殿御前にて水番を勤○同十一年見宿例
のまゝ疵を御預り別に長篠城二万石を領し
慶長十三年菅沼伊賀守定次流罪の時
并伊右近直勝并父中務忠勝松平摂津守
忠政ハ伊賀上野城をあつかりしか江戸へ来る
同年八月石川日向守家成と共に小代を守
備て○同年九月菅沼和泉守に成らる

伊賀国を領への時城を預り長篠より
移る○同十四年八月十六日長篠濃米り
つき十月七日
東照宮より来国光の刀をたまふ○同十九年閏
二月十六日より廿二日まて
台徳院殿田原御鷹狩の時供奉○同十七年
十二月廿七日駿府ハ参勤○同十九年十二月
廿七日叙爵織部正と改○同年大坂冬
御陣にハ奥平美濃守忠政か組たり

使者にて仕寄を附大筒鉄炮数千挺を
続ひ井上外記正継稲富宮内重次牧野
清兵衛正成に命せられしかハ城の櫓
櫓を崩し城中大に震動すること夥しけれハ
城中より和議を入て和睦となりぬ其後
台徳院殿御目見の時伏見城にて召され大炮の御
ことを仰られ其事を委細言上稲校存候す○同
二十年大坂御陣の時も忠勤を組ミて
四月御供して出張五月六日大和口より池向

六日の組道明寺にて合戦に及ひ家人を賞
沼樺左馬守宮崎とよりその井上小左衛門
宮利を付る同七日首百余級を打取
時宮寺も明石掃部助か郎従と討ちて
まつり宮部のちんゆへ御書を給ふ作
左衛門宗長と云ける者に其あつけ此流刀依
前業ありてより代々稲構し来て
東門秀康卿にも勤めしかとも定例有所
せしか其後○元和二年五月廿六日所地

の御縁辺を以て〇同五年御上洛の時ハ
長霖洪水によりて供奉にもおよはす御帰りより
上京この時ハ米千五百石加増合せて弐千
石余領〇同六年五月朔日
東福門院御入内の供奉を命せられ
より上京所司代と供奉し御入内同日
右筆たるによって供奉す〇同七年四月
朔日参勤同月十八日江州所司代ハ鶴封
三万石余をあらため合せて二万五千石

石となる〇同八年嫡家菅沼伊賀守
宗重越前忠直に仕へしか病死するによりて
のちに宗重ハ野田菅沼の正統たるによりて
嫡流あるによって宗家より六つ打輪の紋
を譲るによって嫡流の紋として宗家ハ
猶もって病死嗣子なくて家絶 其子ハ九の内へ打紋を / 分封ハ後これを以て家紋とす
引き続き菱形の三打輪の紋を用ゆ 〇同九年
台徳院殿御上洛六月七日所司代の城へ御入宿
のちに紀州時服白銀を給ハる 還御の時

同四月廿一日御宣下被為在○同年
大猷院殿御上洛七月十一日勝訴様御一
宿御後白銀を賜ハる還御の時又八月八日
御宣体を被為○寛永元年二條御城
御成の節能御拝見の上にて被仰付候も
台命により脇役を勤む此時一ケ所の大日
より御目見○同年十月廿五日大
猷公朝鮮人御馳走の役を勤む○同二年月日不知
帰国の時も又御馳走の役す○同年十二月十二日

○還御の時十月六日御
宣体○同年
大猷院殿御上洛
移り勝訴様へ御一宿
此時御後白銀を賜ハる

台徳院殿より勝訴領の御茶屋を給○同
三年
台徳院殿御上洛六月廿九日勝訴様ニ御一宿
濃ミの此時白銀時服を賜ふ九月廿八日　還
御の節も宣体を被為御上洛中九月七日
御茶の時苦労る此儀事し
宮居のうち清水御茶屋の庭を作
る九月十一日　還幸の儀等を勤む
○同六年　江戸御城石垣御普請ニ付

信濃伊豆国より石を献上す○同十年
将軍家より白銀三百貫を下さる○同
十一年御上洛七月九日十日御参内
城九日には嫡子左近衛少将も御同道十日まで
天守上覧御遊覧中一湖水へ御船にて
遊覧せらる

浪の鏡も志川紀州は水海の
やはせの梅子の船よりもしるし

此時 御前にて御茶湯 御相伴の志保

時服白銀を賜ふ左近衛も時服白銀を給はれ
家光公上洛に付大黒屋より今泉四郎兵衛出店
御溜御同道時服を賜ふ 此時御相伴の砂糖五斤を献上 ○同年
七月廿一日二條御城へ家門御参賀の
ここに御三家并国持大名の席を給ふ
○同年閏七月十一日壱万石加増ありて
丹羽亀山の城主となり替地三万五千石あたる
将軍家へは佐久間捨真名勝亀山城へは
鶴井次郎右衛門を信濃へ渡しける

同年十月東叡山領の御用木下奉行を務○同年
八月二日祈禱の御礼として黄金拾枚献上○同十
二年十二月家族を召江戸へ移る○同年
四月廿日八代洲河岸にて朝鮮人曲馬を上
覧の儀事○同年十二月二日安宅丸の御船
まで召されし時も儀事す○同年七月七日御
譜代の面々へ拝借仰付らるるの時宰書
或方へ子女を係ものを○同十二年十一月廿八日
朝鮮人来聘の時大津まで御迎役同年

同年十二月十日御宮にて御池定役を勤む○
同年江戸御本丸御普請の時大手(?)加賀守
少将殿(?)御普請所の助役を
勤む○同十五年九月十五日
崇源院殿十三回御忌御法事増上寺にて
御執行の時表門の御番を勤む○同十六
年四月日光山へ参詣○同十八年八月二日
厳有院殿御誕生之時蟇目役として来国俊の
短刀并時服白銀を賜ふ○同十九年

二月九日
巌有院殿山王へ御社参の供奉○同年
二月より外桜田御門番たりし冑
大猷院殿日光山へ御社参御殿あるの日
御番所ゆるされし戸田左門牧野右馬允松
平丹後守ら三人御留守中御関所
改めの事仰付らる○同年五月廿二日
御鷹の事にて渡辺半蔵重綱に御沙汰の事
六月廿八日日光御目付丹後守右京亮に至る

八月廿一日左衛門重昌切腹せしむへきむね奉書を
和泉に持参し上使として御使を務む○同年
九月十六日
崇源院殿十七回忌御法事中増上寺
霊屋勤番○同年秋日光山へ供奉○
同廿年正月十七日江戸にて死す五十七歳
法名亀山宗賢寺に葬る墓あり
大猷院殿へ[illegible]乃脇指
巌有院殿へ重次の刀を献る

定武　掃部　修理
父定勇家臣たり大坂御陣の時
首二級を取しより掃部助と称せしと
いふ

定宣　一　藤助
後に田中主殿臣と称
別に家を立

台徳院殿御小姓として大坂夏御陣の砌
志ゝ鴨野表の戦ひに首一級討て営家
六年五月廿六日田中久之衛右與ゝ病死
のとき　台命によりて鐘中長子也
なるを家督たまはらく

定昭　左近　左近大夫
従五位下

江州膳所城主より寛永十一年七月九日
御上洛の膳所城ニ御立寄の時拝謁し
時服白銀拝領○同十二年五月奏者八
月朔日初て御禮○同十七年十二月廿九日
叙爵○同十九年二月廿日初て御暇
○同二十年二月廿二日家督丹州亀山城
四万五百石なりしか三万八千石拝領弟分
水野主水ニ千石つゝ五百石分知同月
始て入部すまに家督の御礼をす○同年

五月廿二日家督後初て御暇○同年十一月
廿日朝鮮人来聘の時大津にて馳走役
八月廿二日帰国の時にて[illegible]し○正保元
年六月より隔年交代となる○同四年
九月廿一日丹州亀山城にて死二十三歳
葬地より和州 [illegible]之輪しく
大猷院殿御霊前の刀
巌有院殿ハ十五歳を献上し系図ハ五月賜
依て猶之備前包文左衛門を[illegible]大坂近

右之家兼見守三年よりく城をあつけ後り候
ゆしくく石川淡泉へて下さるる四日安
永元年壬正月廿日宗服弟ニて永定實へ主
税定賞へ五右き遣し仰付さ被仰ハ織部正役
式右エ門文左衛門よりへても譜代の者へ申付
く家督申付さくく右エ門文ハ多
年にしく病気不便に思召御家人
おろそかにハ身分に相應なるへし
こりへ近年以来の様に成らすと申下さ

ましる候なりけり亀山城ハ松平伊賀守
北條丹後守永之税よりハ二割にしく五方石
下さるへくしとさきまいて野田の事地ハ別人へ
御りさまハその通りにかくて永ハ七千石
主税へ三千石下さきまいし石年亀山所乃
貢之税ハ家人等へ仰しまうに何くれなく
こさるる　仰のよし　酒井讃岐守殿被仰合す

定賢　主水　桜沢某

初　定治

江州膳所城ニ生ル○寛永十九年六月
七日初見○同二十年十二月廿二日母別
亀山領ニテ千石分知○同廿一年十月朔日
崇源院殿御霊屋御修復助役ヲ勤ム○
慶安元年閏正月廿日別ニ七千石ヲ
三河新城ニテ賜ル○同二年八月

江戸大風御城破損ノ助役仰付ラル
○承應三年十二月十八日御役ヲ辞ス依テ
隔年○明暦二年正月廿五日甲府在
番ニ○同月十八日辞ス○同三年五月七日後備
○寛文六年五月十五日駿府加番仰付ラ
ル○在番中ニテ其後九月八日参勤
八月十日在所ヘ辞ス九月廿一日ヨリ駿府
ヘ加番○同七年八月廿一日駿府ヘ在番ニテ
参勤ス○同八年十二月廿七日

百石ツヽ並ニ御目見仰付らる〇笠井
八日甚兵衛より御目見之上徳氏大公石ニ則は
て席ニ四組まかりあるのかく定代を勤
つ延宝八年九月十六日火盗賊人見とし
もの〇同年十二月廿七日伊奈左門ら代
箕輪志摩ニ被仰付中止同九年二月
十七日志摩遠島〇天和三年二月十二日
甲斐国福井八郎右衛門子福井清太郎と
此飯田四日五郎へつけたり〇貞享元年

三河記御撰ニつき同月六日家傳の旧記
を差上る〇元禄元年六月九日大番
頭〇同年八月二日大坂在番中(福
井清太郎事死人仰付られ清太郎ハ
小笠原土佐守へ預らる〇同年十二月廿
七日叙爵播磨守と称す〇同三年十二月
二條在番より上京同四年十二月四日二條
にて死去六十六歳江戸四谷全勝寺へ
葬る〇同九年十二月十六日老を辞して

真長の刀を嫡子織部より献之

三郎 四郎 織部

定易

初 定重 定通

延宝七年四月廿八日初見へ○同九年十二月十一日寄
父之存生中西丸へ出仕天和元年十二月朔日元
服四年十二月廿日家督相続御番代大番頭
○同八年十二月十八日家督無相違寄合之節一

出勤○同十二年四月廿一日大番川窪修理
組頭稲垣小右衛門跡同十六年
六月十一日修理組頭死去○宝永四年十二月
又日同元御門跡御上京之節同年十二月
同十六日出勤同年十二月十一日御譜代○享
保七年十二月廿日御用御取次駿河風土記
一冊献之○同八年二月十八日松平飛騨守
忠隆家断絶の記出来尋ニつき二月廿日
差出之候旨同十一年四月廿七日

被仰付〇同年六月十六日老衰ニ付常務被免
〇元文四年七月六日死七十二歳四谷全勝
寺ニ葬

定用

初　定孝

瑞右衛門　彦次郎　大膳

新八郎　織部　織部正

従五位下

一宝永六年十二月朔日初見〇享保二年十
二月廿七日家督相續遺式大分石〇元文二
年十一月廿一日大番頭〇同年十二月十
六日叙爵織部正と改〇寛保二年十二月朔
日伏見奉行〇同年十二月今ニ付て五千石
備中ニ於て被下万石以下ニ非人被申付
すへて五百石文候の下へ下され候て
四百石ハ一万石以上ニ並ニ或四百文
候ものハ一万石以上の人ニ及ぶ年ニ納

のまたなれとも思召ありて十年
織之助と改めし御子供同年十一月
十六日西丸○寛延四年十月廿六日
惇信院殿御側○宝暦十一年八月廿日大御
帝覧之節御譜代大名嫡子次被仰付る
○宝暦十二年十月廿日
孝恭院殿御誕生まて御付十二月朔日御附御側
○明和二年十二月廿六日駿府御城代○同
三年二月廿六日西丸○同六年二月廿六日

御城にて死六十八歳同寺に葬

定庸　藤次郎　新八郎　織部

宝暦六年二月廿六日初見○明和六年十六
月二日家督御譜代大名並○同七年十六
月十二日初而西丸○同八年十一月廿二日奏者
勤ム○同年十二月廿六日死六十七歳

同年十三歳

定和

藤次郎　新八郎　織部正

初定教

明和九年二月十日家督○天明元年

八月廿六日初見○出仕代大番並○同二年七月

朔日御小性加○寛政二年五月廿九日御書

院番頭御勤中不調法同年十一

月廿五日御勤之処改易○御小性組御奥之

御役の時御仕中絶せしに同二年四月十日

同役の事にて御勤御小性組御奥之

御役の時御小性代大右御勤仕之へき

よし御請仕○同九年四月八日大

御番頭○同年七月二日叙爵織部正

之役○同七年二月日小今京御精佐

之御構の役に勅使同八日御雑物乃

康二之丞殿○同九年八月晦日死ス、二拾
某、同寺ニ葬ル

定賢

寧之丞　将監　新八郎

初め忠恕　實ハ松平遠江守忠告か次男

寛政九年十月二日家督○同年十一

月十五日浚明院殿大名並○同年十二月廿二日

新八郎と改○同十年六月十二日初て

在所へ御暇

○家督献上物ハ毎年ニ二月のうち串海鼠

一箱五六月のうち干鱈一箱十一十二月のう

ち粟一箱献し、御年始御精

として献上の時ハ一万石並に准して氷蒟

蒻一箱を献し、御番頭へも献上す

親氏君御代　同姓新八郎定實之書上

菅沼（古ハ富永）
源姓　家紋　六打桔梗也

右ハ三郎次郎光家次男

資長
小次郎　伊賀守
三河国設楽郡野田城主富永兵庫助
伝資之親族也　伝資之嫡子富永資[illegible]之子

めく連枝なりけれは資長を招きて君子と
す親の同國同郡荒浪の住人荒浪九
彦左衛門忠道といふものゝ一女ありけれは信
ミ資計用して資長に嫁せしめ忠道の
家督を継しめ荒浪伊勢守資長と改
姓しぬれは後に左衛門と称し侍りけり
親氏君二男酒井与九郎広親の宅に御逗留中
近隣の源氏として尊崇して御逗留の時
忠道を本に列せしめける

親氏君の御代は宗旨を傳へ給ふ志ありて
兼て資長
親氏君に属せる世嫡宗家は鳴田荒浪と
唱へ家紋は打出なり資長兼而備へしむ
上京の時寄力　叡慮に達し
同君に言上して大打の鼓を賜はり
つかも　叡感斜ならす打出の家紋を備
是より子孫相續し嫡流は打様庶流は
角違又は九の内或は形を替て用ゆるも

代々事ヲ詳ニス失

定成
伊賀守
文明七年十一月廿日死

満成
三郎左衛門
子孫長篠菅沼ニ又ハ三州設楽郡

長篠ニ居住

之成
新九郎

修則
下野守
法名湖吾
子孫紀伊殿ニ奉仕

俊弘　次郎太郎

元景　次郎太郎

永禄十一年十二月十二日卒
初長篠菅沼左馬助元貞家臣ニ候て
遠州井伊谷井伊肥後守家臣となる

忠久　次郎太郎

東照宮遠州御入國之時井伊谷ニ入令
御案内のうちなる後井伊谷ニ給わる
猶家人となり子孫
御當家ニ至る迄菅沼伊豫守家

貞行　伊賀守

定信　刑部少輔
忌宮別当

定家　伊賀守

定盛　伊賀守

某　孫太夫

定勝　久助　伊賀守

三照　久助　伊勢守　入道德也

初今川家ニ仕後
東照宮ニ属シ奉リ文武國経ニ属シ
元亀二年再帰参シ之別[illegible]伐度ニ後
度々当御陣ニ参シ文武兼秀康公ニ附
ラレ越前國ニ居住老年ニ及ヒ[從往]ヲ辞
発シ元和元年十月十二日死七十五歳同

國福井孝顕寺ニ葬

某　奥平左京

七郎太夫

三春
松平中務守家臣トナリ元和元年大坂ニテ討死

女子

山上甚左衛門某妻

定房

新五左衛門

越前秀康卿ニ奉仕

定重

半左衛門

伊賀守

東照宮ニ奉仕後紀伊頼宣卿ニ附られ其後

父の跡を継て越前忠直卿ニ仕ふ御陣

供奉す元和八年八月十日越前福井ニおゐて

死す子孫なくして家断絶するの故嫡家相続

の後ハ村井ハ菅沼織部正定芳野田の

正統なるをもて定芳ニ譲る

某

勘左衛門

御旗本ニ奉仕蚤死

高定

吉左衛門

子孫松平越前守家老本多内蔵助家人

此ゟ不分

三茂

吉左衛門

越前秀康公ニ奉仕

田峯

菅沼大膳 寛永

同姓菅沼新八郎定盈家臣之

定政 一ツ打貫

後 松平三河守様号春砥

菅沼伊賀守資長長男

伊賀守

定成

文明七年十一月廿八日病死

貞行　伊賀守
嫡流ハ田峯菅沼ト稱ス

定信　刑部少輔
初ハ三河田峯城ヲ築ク

定忠　大膳亮　賞斎

定康　新三郎　大膳亮

鵬雲文将異
三河設楽郡ノ永住寺ニ葬ル

定則　織部正

某
新七

定継
新太郎　大膳亮
弘治二年奥平伊賀守同名と今川
義元の命を背同年八月五日切腹

某
左馬次郎

定直
源兵衛

定氏
十郎兵衛　信濃守
東照宮ニ奉仕今ニ菅沼藤十郎家

定化
八郎兵衛　常陸助
東照宮ニ奉仕後武田ニ仕ヘ属ス元亀
二年再帰参

定政

愛菊丸　菅沼藤蔵
後　土岐山城守
實ハ土岐上総介定明男
天文廿一年父定明濃州において討死
の後定政若年たるにより菅沼藤蔵
と改め其後本姓に復し後土岐山城守と
あらたむ

某

小法師　刑部少輔
三河国田峯新城武節三ヶ所の城主
永禄四年
東照宮にはしめて仕へ奉る時一族并三夫の十郎
兵衛八兵衛林左京ことごとく人質の
沙汰判物を給ふ其後一向宗一乱の時
戦功あり元亀二年武田信玄に属し

天正三年長篠合戦の後田峯ヲ立ノ
退キ後別所作手ニ居住天正十年
武田滅亡の後滝川ニ属ス
東照宮ヘ帰参ヲ請フテ其罪ヲ赦免セラレ同年
八月牧野[illegible]

定利

従五位下大膳

元亀二年田峯[illegible]

八郎定盈ト称
東照宮ニ属シ後ニ従五位下ニ叙シ上野
吉井城弐万石ヲ領ス慶長七年十
月廿二日死

忠政

忠七郎

従五位下松平摂津守
實奥平美作守信昌男

母　盛徳院殿 東照宮御女

東照宮の御孫の故をもつて文禄四年十六歳の時

台徳院殿御前にをひて元服し御一字を賜ひ備前兼光の御刀を賜り忠政と称す○慶長二年忠利の養子となる○同七年忠利の家督に別府を并せ弐万石を領し○同年濃州加納城十万石を領し松平の御称号を免さる

さらに松平摂津守と改む○同十七年侍従○同十九年十月十日三拾五歳にて死

某

小源次

忠隆

松平飛騨守　従五位下

仙福

慶長十七年父遺領加納十万石を

以上絶

右頃ハ元和七年
台徳院殿御前ニて元服御一字并
忠文字の御刀并脇指拝領之後
寛永九年四月五日死二十五歳

某

松平右京
寛永九年当歳ニて父之跡相続
十万石之領同十二年七月八日四歳

採用御取

菅沼

藤原姓　高七拾八俵

家紋　丸之内竹貫
手之形

大織冠鎌足末裔ニ而藤原ニ而家何之頃
より藤原姓ニ改候哉之系図焼失致
國ニ而是迄之儀相知不申

改國

菅右衛門

寛文元年正月
清揚院殿御逝去ニ付石出之高ニ而拾俵二人
扶持○桜田ニ而玄関御帳方加役ニ五拾俵
三人扶持都合七拾八俵○延宝九年二
月十五日死高田威通寺ニ葬

宗高　　伊右衛門
天和元年七月廿日家督小普請○
同年御目見○同二年二月御書院清
水番○元禄十年八月二日同所御徒目付
○宝永元年十二月晦
文昭院殿西丸江御入之節御供○同年
十二月廿四日死同寺ニ葬

忠勝　　源太郎
宝永元年十二月日不知家督小普請

○正徳元年十二月廿八日死葬同寺

政雄　　源八郎

正徳二年二月家督小普請○同年
二月廿六日死同寺ニ葬

政元　　伊太郎

正徳二年六月二日家督小普請○
享保十二年七月十一日
月光院殿奥方番○元文二年八月
十九日同添番○寛保元年
十月九日
刑部卿殿小十人組○同二年正月初見
御流頂戴○寛保二年五月[illegible]日病免
小普請○延享元年八月二日隠居○
明和二年七月二日七拾二歳ニ而死

同寺ニ葬

太玄　　源之助

延享元年八月二日家督小普請ヘ〇同三年六月十五日御番入〇寛延二年
二月二日寄合衆ニ而死去　山王宗寺
ニ葬

忠國　　彰助

宝暦九年五月七日家督小普請ヘ〇
明和二年四月廿八日ニ寄合衆ニ而死
去　同感通寺ニ葬

君達　　岩之助

天明二年七月二日家督小普請ヘ〇寛政改

巳年九月廿五日初見

東照宮御代

○〔宮〕菅沼

源姓

高百四拾俵

家紋 桔梗
九ニ行貫

本姓大江氏庶流菅沼次郎右衛門菅沼又五郎

実名不知又五郎より何代相続候哉不知

実名
不知

又五郎

定吉

久右衛門　幼名又次郎

東照宮へ三河にて奉仕故ありて信長に仕甲州田里合戦ニ於て秋山紀伊守を討捕信長より賜る感状の写ハ本帯焼失のち中傳信長生害の後蒲生飛驒守氏郷ニ仕助右衛門と改名○年月日未詳ニ死会津光岸寺ニ葬

蒲生氏郷ニ仕○浪人○元和二年月日不知死

右出

崇源院殿広敷番○寛永九年月日不知

大猷院殿へ召出時計間番○明暦元年死浅草善徳寺葬

吉之

久之丞

慶安元年月日不知ニ召出○同席

清揚院殿御附初目見○寛文元年月日不知
甲府武具奉行○延宝四年十二月八日死
甲府浄光寺葬

安定　久太夫
延宝五年家督小普請○同七年月日不知
甲府□□奉行○年月日不知小普請○
宝永二年甲府より□□地□□小普請
○同七年正月廿四日隠居○享保十二年
九月二日死七拾歳麻布□林寺ニ葬

生定　久次郎　辨之助
浪人
実秋山嘉之丞和賢男
宝永五年七月十二日聟養子○同七年
正月廿四日家督小普請○正徳二年二月
四日御広敷添番○享保十八年十月廿四日

支配勘定○同十八年二月二日御勘定○
寛保二年十二月十八日御代官○寛延
三年六月廿二日病免小普請○宝暦
十六年九月廿二日死七拾六歳同寺ニ葬

定常　久右衛門　初名彦七郎
西丸御裏門番之頭
實ハ布施十太夫忠侍男
享保十五年四月四日養子○元文五年
六月廿二日御勘定百俵○延享二年
八月十五日御廻米方懸リ○宝暦二年
七月廿日佐渡國検見御用○同年九月
廿五日五拾七歳ニして死佐渡相川大安
寺ニ葬

定昌　安十郎
寶暦二年十二月四日嫡孫承祖○同六

年同十一月廿二日家督小普請○同十二年
十二月七日初見○明和六年正月廿六日
御勘定○安永六年十一月十日宗東筋
川々普請御用○同月十六日出精達
弐枚時服二ッ○同七年五月朔日扉尉
同二日褒金弐枚時服二領○寛政元
年正月廿五日出代官○同四年四月晦
関東郡代支配御代官○同六年六月晦
来春小金牧出麻持御用ニ付仰付○同

七年四月十日褒銀拾枚○同十年二月朔
日参向之公家衆御馳走御掛御用○同年
五月廿四日褒美銀五枚

定立

長三郎

寛政六年六月十二日初見

清康君御代

菅沼

高弐千弐拾五石余

源姓　家紋　丸ノ内打違　桔梗

土岐ノ庶流頼光より頼貞まて
十四代ニ三河額田郡菅沼村住人頼貞
六代

定氏

信濃守　十郎左衛

三州額田郡寺津城主大河内左衛門佐
元綱女為水野右衛門大夫忠政妻之子
生嫡男彦十郎次男彦次郎二女
御太方様也右政離別之後為菅沼
後為定廣妻信濃守定氏生於
御太方様異性同胞之姉也
清康公
廣忠公 御代より奉仕
永禄年中於逆叛殿門城与甲州
山家三方衆欲喰留之処定氏力

戦二之由緒をもつて押返し候処定氏
父自門之内寺部信 之舎兄貫枝之紋
附取○其二頭射殺田ニ而出之門氏之父殺
出作假之祝定氏打殺令入道路末
甚平之討死又与門宇都而掛射城
之之元表門孫八郎之討取○其二州
之之門家人戦○信玄入数出張之節
鳳房兵設備之河野之為菅沼孫二右衛門
林紀伊守と云もの之追掛殺○元亀

三年十二月廿二日味方原御合戦之時
信濃守越後守父子供奉致討死于時信
及言上御勝利依之為御褒美御手
自長谷部国重御腰物頂戴之
不持○之後為其恩賞吉川流津
島原菅沼竹倫村友頭
元康公ニ奉上候ニ而御感状頂戴
之不持○年寄ニ而隠居○号長九
年七月廿六日八十四歳ニ而死葬地ハ知

越後守　彦十郎　初新三郎

定右

東照宮
台徳院殿　両御代奉仕
駿州田中之城御攻之節門越ニ先
登○天正二年五月廿一日長篠御合戦
供奉高名○長久手御合戦供奉首取
級討死同弟ツ家来ニ内 岡田又十郎 高木十蔵 高名
家来黒田甫安清三郎二人共ニ高名候

同國安祥荒と唱候同黒岡村地下士
黒岡市郎右衛門廣定と申もの
御當家之御草創ゟ属
廣忠様之代度々戦場之供奉軍功有
之候ものゝ悴市郎右衛門廣隆と
申者天正十八年関東へ御入国之節越
後守定吉へ従ひ其後當村ニ来り七代
相勤候處右者ゟ之ニ以御用之訳も
以之候得共幸八と申者病死仕候而越後守へ随身

御入国之節越後守儀ハ申伝も延宝
之頃居宅類焼之節由緒之諸書物焼
失仕候ニ付巨細之訳ハ相知不申候得共奉
對御當家御奉公振り仕武功も有之
候者ニ而先祖信濃守麾下ニ而相働
候由緒ニ而越後守へ随身ニ而越候者
相分兼候ニ付申傳○文禄元年始而
大番ハ二組ニ而　御付同志人定吉
○朝鮮御陣之節御供奉関東御留守

一 政

台徳院殿ニ御附○慶長十一年七月
十七日五拾石加増ニ而武州比企郡上唐
子村洋雲院ニ葬

定俊
彦十郎
台徳院殿
大猷院殿
両御代奉仕
慶長十一年九月日不知家督○同年十
月焼火之間番ニ成○元和四年九月
十五日二拾五俵ニ而死同所ニ葬

定政
彦十郎
大猷院殿
厳有院殿
両御代奉仕
元和四年父彦十郎本領高ニ二十
五拾石之内弐拾五石定政ニ弟
定之弐拾五石分弐之郎定勝ニ分知

大猷院殿御代同姓ニ而妻○承應二年
御小姓組○寛文元年十一月廿八日ニ而先
手御鉄炮頭○延宝五年正月廿二日死
六拾八歳同寺ニ葬

定廣　茂十郎　七之助

延宝五年二月七月十七家督○同六年二月
廿九日ニ而書院番

厳有院殿
常憲院殿
文昭院殿
御代勤仕○宝永六年閏月朔日ニ而小
普請○同七年七月廿七日隠居○享
保二年二月廿四日卒七十二歳法名
花同寺ニ葬

定昌　藤十郎　初七十郎

実松平次郎右衛門貞〇之二男
寶永七年七月廿七日十七歳ニ而家督

小普請○享保九年七月十一日御書院
番○同十七年九月小普請入○元文
二年十一月十七日六十二歳ニて死 日逢
江葬

定好　　主税　　初松次郎
元文二年月日不知家督小普請○元文
四年十一月廿五日田安御殿勤番○
同六年十月廿八日西丸御書院番○延
享二年二月廿日五十二歳ニて死
同寺ニ葬

定亨　　和泉守　彦十郎　　初小膳
延享二年六月二日家督小普請○
宝暦九年五月二日西丸御書院番
○御移徙之節

大御所様ニ附

惇信院殿薨御以後　宝暦十一年八月二日

西丸書院番　同年十二月十五日

大御所様附　○明和五年正月十一日

御使番　○十二月十八日布衣　○同六年十一

月廿九日羽州庄内（酒井左衛門尉忠寄同時）○同七年

三月朔日依同巡見之事黄金三枚拝領之（）

同月十二日出仕　同年七月九日御附

○同九年十一月廿八日西丸御附　○安永

二年二月廿日御先手弓頭　同日火付

盗賊改　○安永五年十二月十二日寄合

ル　○同月諸大夫（十六日）　○同七年八月七日死

四十八歳　南都佐保田村瑞景寺ニ葬

彦十郎　初又右

定富　寄合

實久世丹後守廣民二男

安永七年十一月五日養子家督小普請

○同年十二月十九日継目御礼○寛政七年十月十二日御書院番

又右

定業

亀吉

某

拝領物年月日 詳ならす

一 志津 御長刀 一振 無銘

一 葵御紋御時服 二

当方代殿
一 御筆御掛物 一幅

大猷院殿御代

同

菅沼

源姓　高二千石　家紋　丸之内一ツ釘貫
角違二ツ打チ
桔梗
沼之字

菅沼織部正定芳次男

新五郎　主税

定賞

初定恒

越中守　伊賀守

寛永二十年二月廿二日ニ御預ケ之父
定芳奉願候ニ付丹波亀山所之内
分知弐百石ニ而被下置同年十月朔日合
知之請取候○

大猷院殿御代

厳有院殿御代初年より相勤月日ハ不知相
仰付ニ而何ニ成候書留無之ニ付不知○
延宝二年九月兄右近大夫病死跡目受
安元年閏正月廿日ニ優兄之跡労ニ付某ニ

御例無之ニ付亀山城ニ而松平伊賀守へ
被下置別段ニ二百石之分知ニ而被下置候
○寛文安定年月日不知請太夫越中守ニ段
ニ好继ト申候ニ年月日不知病死家
合○元禄十二年正月十二日二十八歳
ニ而死因ニ而谷之延勝寺ニ葬

定辰

徳之代 民補

貞享元年八月十日
常憲院殿ニ初見○元禄十二年七月十八日
家督寄合○同年八月十二日家督之節相
○享保二十年八月十五日御先手ニ被
○寛保二年五月朔日新番頭○延享
二年五月朔日西丸御旗奉行○宝暦
三年二月廿四日老衰依願御免時服二寄
合○同六年九月十七日八十三歳ニ而
死同所尓葬

數原
定好
実ハ亀井隠岐守茲親次男
實家ニ在有以前享保四年正月十
五日
有徳院殿ニ初見○寶暦九年六月九日
六十八歳ニ而死同所ニ葬

定賢　長吉　民部　兵庫

實安沼民部定辰男

宝暦二年八月十二日嫡孫承祖○同五年三

月十五日初見○同六年閏十一月二日

家督寄合○同年十二月十九日家督法

礼○明和四年九月五日二十九歳ニして

死同寺ニ葬

定寛　初定経　萬之助　[redacted]　左京

實菅沼勘負定好男

明和六年六月廿一日養子○同四年十一

月四日家督寄合○同年十二月九日家督

之御礼○同五年四月九日初見○安永

四年五月朔日大坂加番○同年七月

勤方出精時服二重二枚拝領○同日西丸

○同月十六日叙爵○寛政二年十二月廿
四日為伺　御機嫌參府○同四月朔日參
上之節御礼○同年五月十六日四十
歳ニ而死同日ニ發

延俊

直七郎　大膳　伊賀守

駿府御城代
実父菅沼織部正定用之二男

天明二年八月七日家督○同年
九月十五日御暇被下初入○寛
政四年二月九日寄合肝煎○同五年
四月五日忌服ニ候処遠慮ニ付召和○同
年五月四日ニ若和御免○同年六月四日
小普請支配○同ノ處十二月十八日布衣
○寛政六年七月十六日御小性組番頭○
同年十二月十八日諸大夫同日伊賀守
○同年十二月廿二日叙位之御禮○同年十月

西丸御書院番頭○同十年十一月廿一日卒
書院番頭

定敬　　平七郎
妾腹之男子ニ而達之又嫡子ニ奉願
寛政十年十二月六日願之通相済

○清康君御代
菅沼　源姓　高二百石
家紋　丸之内打梭
五角桔梗
多田摂津守源頼光末流
信濃守
定氏
清康公
御太方因服之人
廣忠公御代御奉公年月不知
浪居法号浄■之

次〇寛文九年七月廿六日死八拾四歳
葬地不知

二男
越後守

定吉
永禄年中喜之丞鉄門ニ成リとつく
甲州山家衆として御合戦ニ付鉄門ハ死ヨリ被
喰ニ無之候得共結構五二曲輪ヲ守リ馬を出候
入御人数門ニ入ニて候ハ御自身門ニ羅貫と打

大坂ニ付羅漢ニ於テ候ヨリ附東文達
ニて御召合之候於ても二候軍功仕御感状並
〇元亀二年十二月廿二日遠州東方ニ
御合戦ニ付竹沢越後守ハ父子共仕
巣討ニ御籠村ニ二候ニ付吉川村滝沢村ニ而
東村竹嶋村ニ而津門村ニ而深沢殿ニ田中ニ
城ニ在候御責候節人質越後守〇天正二年
五月廿一日長篠御合戦ニ候軍功有之候長
久手御合戦ニ候越後守首高名有之候

○文禄元年太閤御番頭ニ而朝鮮御出陣之
御供仕関東江御帰陣之後
台徳院殿御附○慶長十一年七月十七日死
五拾四歳武州比企郡之内[illegible]村浄土宗[illegible]院ニ
葬

定則

忠右衛門　作十郎

台徳院殿
大猷院殿　御代御書院番○寛永二十年十月
十二日死五十四歳葬地保善寺ニ葬

定常

忠右衛門　十兵衛

大猷院殿
厳有院殿　御代御書院番○寛文七年病気
小普請入○天和二年十二月廿一日隠居○
貞享元年六月十五日死同寺

定治

長兵衛

浪人
実原又左衛門次男
天和二年月ゟ養子○同三年十一月
廿一日家督○貞享三年五月廿五日御
書院番○元禄二年七月十二日桐の
間御番○同五年七月晦日御小納戸○
同七年正月十一日ニ而御留守居○
享保二年二月十一日ニ病免ニ寄合○同
三年二月十七日死七十五歳同ちよ
葬一

吉次郎

定泰

實松平治太夫貞忠二男
元禄六年十二月十八日家督○宝永
六年四月六日部屋住より御書院番三
百俵○正徳四年二月廿七日御小納戸○享保
二年二月十七日家督○同七年十二月
進物御番ニ而免ニ帰番○同十二年正月
同廿八日御使番御供○寛保二年二月廿日

虎之助小普請支配金田組○同年九月十一日
死七拾二歳同所ニ葬

長左衛　八十郎

定能
実杉本又十郎親春二男
享保十四年九月十九日聟養子○
元文四年六月廿九日部屋住より
御小姓組ニ二百俵給○寛保二年十二
月廿六日家督○宝暦十年九月十日
死五拾七歳同所ニ葬

兵庫

定景
実永井彦又左衛門泰儀次男
宝暦二年十二月十四日聟養子○同
十年十二月四日家督○同十二年九月
十四日死二拾四歳同所ニ葬

五郎左衛門　　熊太郎

正勝

俗名分兆

実森門浄雲又勝能二男

宝暦十二年十二月十日養父家督小普請

○明和二年十二月廿一日初見○同三年

三月廿九日西丸御小性組○同四年十

一月十日病免小普請○寛政五年九月

十二日御目見院広敷様とくく　叙郷

上院就紋縮緬二反拝領

東照宮御代

菅沼　　源姓　　高五百二拾六石

家紋　釘貫　桔梗　丸ニ一文字

源経基主之後胤ニ而額田郡菅沼郷ニ代々住居家名菅沼と称御番ニ

定正長男

二三郎　　源定清

正完

東照宮之御奉公○慶長六年六月朔日死

葬地不知

二三郎　一年

正次

東照宮へ奉仕し御七拾人組頭に被渡候
死去年月不知
台徳院殿江新規ニ御蔵米五百二拾六石ニ而
判物紛
大猷院殿御代御道具奉行ニ被 大番頭奉行

寛永十年十月廿六日死 五拾九歳 牛込
寺町龍峯山保善寺ニ葬

正義

二三郎　勘兵衛

年月日不知御小姓組より西丸御書院番
御百俵
大猷院殿御代御加増ニ而弐百俵被下置 寛永十年十一月朔日
四百石○寛永十年 月日不知 御加増 ○ 御書院番

昭泰　寛永十五年御目見明暦二年十一月廿六日△書院番△西丸御留守居○萬治元年
十二月十六日死同年十九歳同寺ニ葬

正氏　次郎兵衛

甲府中納言殿ニ而[illegible]戌年曽祖母書
院番[illegible]組与力相勤候所
其後[illegible]父
浜松ニ付没落

正利　三五郎　久三郎　平右衛門

万治二年月日家督寄合小普請入○年月日小性組
○同月日病免小普請入○元禄七年五月
廿六日死同年廿二歳同寺ニ葬

政英　三五郎　久三郎　三五郎　伊織　政信

小十人同年平野支組与力
實ハ菅沼兵左衛門重秀次男

元禄四年十二月廿二日遺跡○同七年
七月十一日家督小普請入○同十一年八月
十一日小姓組○享保十一年十二月廿七日小金
原御鹿狩歩行勢子相勤○同十四年四
月十九日病免小普請入○延享元年
八月二日隠居○同四年十月四日死
六十六歳牛込幸国寺ニ葬

三五郎 読之助 友之助 織山

政安

実政英之次男
享保十九年六月廿日次男惣領○延享
元年八月二日家督小普請入○同年九月
廿日田安勤番○同二年又月十九日西丸
書院番○寛延元年九月十一日羅漢寺
筋 御成之節中的ニ而反物拝領○同
二年九月十九日羅漢寺筋 御成之節
中的ニ而反物拝領○天明七年十二月
十四日老衰小普請入被下金御校場○同八年

四月十四日隠居○寛政十年二月廿五日
死八十一歳同所ニ葬

三五郎　彩八郎

政長

一安永八年四月十九日家督小普請
○同年八月廿四日御小性組○寛政四年
御白書院ニおゐて絵術之上覧及御褒美頂戴○
同七年二月五日小金原御鹿狩之節

歩行勢子相勤

菅沼二太郎より書上

菅沼　高弐百五十石

源姓　家紋　釘貫　桔梗九ツ一文字

源経基王之後胤ニ三刕額田郡菅沼郷ニ
代々住居家名菅沼と称菅沼二太郎正次
二男

正氏　次郎兵衛

甲府中納言殿ニ而百石ゟ二百石○宝永
七年二月廿八日死（不知齢）牛込保善寺ニ
葬

正直
圖書 （隠居名）益應

年月日不知中納言殿ニ而二百五拾石被
加増都合五百五拾石○宝永二年同正月六日
甲府御人数ゟ西丸焼火之番頭
○同六年八月廿六日御役御免○享保元年
正月廿八日二所先知合○同十四年十二月
廿六日隠居○寛延元年九月廿七日死
八拾六歳同寺ニ葬

正於
圖書 金五郎 龍宗
宝永二年十二月廿八日初見
宝永六年正月六日新番ニ被仰付至
御広敷二百俵○享保十四年

三月廿六日跡目家督五百五拾石○延享

元年十月十五日御書院番組与頭○寛延

二年正月廿八日死 年齢六十五 同所ニ葬

孫二郎

某

寛延二年五月二日家督小普請○同年

七月二日評定之節口上ニて御吟味之上父

跡書取渡所之事共不埒之儀候ニ付

御咎改易

大猷院殿御代

菅沼　高二百俵

源姓　家紋　釘貫　桔梗

源頼光後胤土岐之庶流

与左衛門

正利

大猷院殿御代新規ニ被召出小十人百俵拾人

枝持○明暦二年六月廿七日死年齢不知法名[illegible]
保善寺ニ葬ル

某 右衛門

重秀

小普請杉浦内蔵允組
実ハ余語金十郎重勝次男
明暦二年十二月日不知家督小普請○
寛文四年十二月十二日小十人組○貞享
二年十月七日小十人組与頭御加増二百俵
○元禄四年十二月日不知小普請○寶永
元年十二月二日死五十八歳同寺ニ葬ル

重政 牛之助

元禄六年十二月二日評定所より大
御番ニ出百俵賜○寶永二年二月十九日
家督○正徳二年十月十七日死年齢不知

同寺ニ葬

縫之助

定久

實菅沼三右衛門重秀之二男

正徳二年十二月廿七日書院番組ニ享保

元年十月廿九日死 年齢不知 同寺ニ葬

三平次

秀益

新御番武田与左衛門組

實田邊三之丞定良龍次男

享保元年十二月廿五日養子跡目小普請

○同十一年 月日不知 大坂御具足奉行○同十

二年十二月廿八日於鄰踊之罰金之救濟服

二服役○寛保二年正月朔日ニ病免小普請

○延享二年十二月二日死年五十六歳同寺ニ

葬

只父　〻治吉

新御番神保四郎右衛門組

実田名之新兵衛良庸二男

元文二年十二月十一日書院番○同年十二月廿六日家督小普請○延享四年二月廿六日死二拾九歳同寺に葬

太左衛門　久米之丞

吉久

尾張殿家来

実塚一仲右之丞惣領

延享四年五月二日書院番○宝暦五年八月十八日大御番○同六年十二月廿九日新御番○同七年九月十日小普請○明和六年四月十四日大御番○安永八年十月八日小普請○天明八年二月廿五日死五十九歳同寺に葬

伊織

匡直

実ハ妻木要之助公繁次男

安永九年四月日不知生○天明六年

十一月養子ト成

主左衛門　民之助　安五郎

春行

喜慶

小普請組川口能登守支配

實ハ若林孫右衛門直芳次男

天明七年十二月廿一日養子○同八年

六月四日家督小普請○同年十二月廿五日

大御番○寛政元年二月十五日二條在番

○同四年四月廿一日鐵砲[illegible]

○同九年四月五日西丸新御番○同十一年

五月廿七日死四拾九歳同寺ニ葬

民之助

正之

寛政十一年八月二日十九家督小普請入

厳有院殿御代

菅沼

源姓　　高二百俵

家紋　丸ニ向一ツ引両
　　　桔梗

菅沼織部正定芳六男

新五左衛門　吉丸　左馬助　大学

定之

明暦二年七月廿八日
父菅沼主水方ニ居住以後新規

国立公文書館
National Archives of Japan

丁ニ法石出当ニ法　織部（八百五十石）初見○万治二年
七月十一日御小性組○寛文元年十二月
十二日二百俵拝領○同二年四月十二日
日光御社参供奉○同七年六月（廿日病免）
小普請入○延宝九年八月（廿日御小性組）拝領○
元禄八年八月朔日死六十歳四ツ谷
全勝寺ニ葬

新見大炊頭　大助　新之丞

延尚

元禄六年十二月九日部屋住より召出
三百俵御書院番○同七年六月廿日桐之間番
○同年八月廿八日御近習番○同年九月十八日
御小納戸○同八年九月廿七日[illegible]
六年九月十九日ニ病免小普請入○延享
元年二月十八日死七十七歳同寺ニ葬

定輝　吉田藤八　吉之丞
初 定宥
寶永六年四月六日部屋住ヨリ被召出
御小姓組ニ二百俵○享保二年十二月二日為御
小納戸被仰付○享保九年正月五日死六十二歳
同所ニ葬

定候　大助
享保九年二月七日嫡孫ニ承祀○元文五年
同七月十二日死二十九歳同所ニ葬
吉之丞　小膳　大學

定親
定尚惣領
実ハ菅沼吉左衛門定穏次男
元文五年十二月五日孫ニ養子○延享元年

九月二十二日大御番ゟ小普請○同年九月廿九日
田安御館勤番○同年十一月廿一日御書院番
○天明二年八月十八日死六十二歳同寺
葬

定署

吉之丞 [illegible] 大学

天明二年十一月六日大御番ゟ小普請○
同五年十月十二日御書院番○同六年

十一月十二日病免小普請○天明八年
四月二日西丸御書院番○寛政二年四月
二十二日御本丸勤○同七年十二月廿日小金原
御鹿狩之節御拳子御投持方ニ而獲猪鹿内
獲所○同八年十二月十日西丸御附

東照宮御代

菅沼　高四百石

源姓　家紋　三ツ釘貫
桔梗
丸之内一ツ釘貫

井伊肥後守家臣菅沼次郎
右衛門元景惣領

忠久
次郎右衛門　如意軒
始今川殿ニ属　井伊肥後守より仕

駿州没落以後武田信玄と
東照宮御不和合ニ而永禄十一年
東照宮ハ菅沼新八郎定盈を以野田ハ
幸之事ニ而候也遠州打入事て
計畧候　上意有之定盈因城
先衆并小山源二郎を以後度覚
菅方ニ奉属
東照宮下り不案之由と申者有處此附
甲州武田信玄ニ志候通有故返答

菅沼并伊谷三人衆と号鈴木長七人
之内都田之菅沼次郎右衛門忠久ハ
定盈一家也故ニ鈴木長吾今泉四郎
兵衛近藤与相忠久宅ニ来り遠州
打入之儀ハ鈴木并伊谷之返答
石見守康用衛門鈴木三郎
太夫重時ニ此儀と謀り相調定
盈も延ばし候と是候ニ付此儀と
東照宮江申上同年十二月十三日

東照宮此忠之御感被為有之遠州河合
高歌英新紀数出来と定盛ニ被下
御證文今ニ相傳候菱沼新八郎
家ニ所持
数出来之御證文并御誓詞定盛
和歌山ノ者因御ニ相添下サレ候延
候ヘとも

東照宮ゟ之御證文相添定盛誓詞ニ延
候加判仕定盛ゟ三士ニ相送申候
御證文并定盛ゟ石見へ遣ニ所持ニテ
其時ハ三人ニ端書ニ而所持ス
又三士之誓詞

且人質とし定盛ゟ差出す定盛ハ
自分之守村として出也三月於彼地
奉侍請

東照宮自長篠御出陣牛久保通り
加茂ニ御駐り牛守村小幡迄被
為陣有之定盛ヲ忠世代御感ヲ
遠州迄御先陣ニ定次郎右衛門
忠久此所ニ相加之被而
東照宮ニ奉拝謁ヲ追後石見守於

本三郎左衛門一所ニ在番ス此
以後於所之井伊若狭ニ在之御忠信
申上候後井伊若狭ニ在井伊兵部
少輔直孝後ニ至り附ニ井伊家ニ仕
分ニ列転ス是迄　六月廿八日死
宗心井伊若狭龍潭寺葬

忠道　次郎左衛門

父ト共ニ井伊家ヲ去ル○慶長八年
四月廿五日死同寺

忠元　宗六　次郎左衛門
台徳院殿御代御めしかゝへ被召出さ之
采地二百石を給ハル　元和二年九月十七日
大猷院殿附○寛永七年八月廿八日
死ス年七十歳ニ而同宝祥寺ニ葬

木三郎右衛門與一所ニ在之持渇ル此
以後於而ニ井伊若ニ在之而ニ御忠吉
乍上意後井伊若ニ至井伊玄蕃
お補走役ト云為附ニ二付井伊家臣
文禄四年十二月十八日死
其後井伊若就禅寺葬

忠道
次郎左衛門

父ハ其ハ井伊家ニ在リ○慶長八年
四月廿五日死同寺

忠元
宗六　次郎左衛門
台徳院殿御代御小姓ニて召出さる
采地二百石を給ハル　元和二年九月十五日
大猷院殿附○寛永七年八月廿八日
死六十七歳二而同宗祥寺葬

勝次 次郎左衛門 七之助
寛永七年月日家督小普請○
慶安四年八月廿九日死二十八歳
同寺

勝重 大膳 次郎左衛門 平左衛門
左門

慶安四年九月日家督○萬治
元年六月十三日大御番○延宝九年
正月十二日大御番組頭○元禄十年
二月十日小普請支配組頭加増二
百俵○同年十二月十九日二丸御留守
居○正徳四年六月廿六日辞仕養
老料三百俵○享保二年九月十九
日死八十三歳同寺

定勝　次郎兵衛　左門

元禄六年月日御小性組○宝永元年十一月御納戸頭○同六年二月廿一日御小性組頭○正徳四年六月廿六日家督○享保同十一年九月十七日御小性組之頭○享保同二十年二月十一日御先手弓頭○元文元年八月十七日死年　葬同寺

武勝　次郎兵衛　重三郎

享保十五年八月十九日御書院番○元文元年十一月四日家督○同二年七月八日進物番○宝暦二年十二月廿八日病免小普請入○同

七年六月廿五日死四十九葬同寺

政勝

上総介　伊豫守　助次郎

主庫　左門

寛延元年十二月廿日為小納戸○同二年二月朔日為小性○同年五月西丸勤○同三年十二月十八日叙爵伊豫守○宝暦七年九月為家督○同十年正月朔日為奏者番勤○明和五年十一月十六日為従院○安永五年正月日光御社参供奉○天明二年七月廿三日組内有故不調法之儀ニ付為役儀小普請入閉門○同年十一月為閉門御免○寛政二年正月廿一日死五十七葬同寺

定勤ゟ

伊豫守 對馬守 大和守 平三郎

次郎左衛門 左門 喜之助

宝暦十三年三月十五日初見え

孝恭院殿御方家之節小人騎馬役

○明和三年二月廿七日御小納戸○

同年三月廿七日御小姓○同四年

十二月十六日従五位下對馬守同年十五日

附役之射留鳥一羽拝領○同年

十二月十六日叙爵大和守○

浚明院殿御筆御画拝領○安永二年

三月十八日思召有之二付御小姓御免

寄合○寛政二年四月二日家督

有徳院殿御代

官 菅沼　　高七百石

源姓　　家紋　六ツ釘貫
　　　　　　　指搦
　　　　　　　丸ノ内釘貫

菅沼伊賀守資長七代孫三州野
田城主菅沼織部正定盈二男菅
沼主膳定成惣領

定賢

九之丞

紀伊頼宣卿に附せられ大番たり

定格
九兵衛
家継大番たり用役兼帯。元禄三年七月廿八日紀州にて死

定寛
九兵衛

家継子孫紀州にあり
主膳正 新右衛門 二郎右衛門

定虎
初定真
二郎九郎
元禄二年九月十二日紀伊大納言光貞卿に新に呼出され三百石給はり
有徳院殿紀州にて清康付添ひ
○正徳二年十二月二日加役として留番

石となる○同六年四月晦日
有徳院殿二丸へ渡入に付供奉○同年
六月廿五日西丸小納戸仰付られ役料九
りく蔵米(こゝに合せて三百石の給
りる○同年七月廿二日布衣○享保
六年九月七日播磨守に叙任し
御服若干拝領○同八年六月十八日
御足高百俵給はる○同十年三月
廿七日小金原鹿狩御用○同十一年

三月廿七日小金原鹿狩御用○同年
十二月十八日叙爵○同十三年日光
御社参のときは旅中御道具の役
に先て勤むへき仰付られ同二月出發
見分として日光表へ發し同四月
十二日先へ供奉同四月廿九日褒
美時服四領拝領○同十八年正月廿七日
石黄金し刀拝領○同年九月十二日
精勤に付加増二百石を給りて采禄

七百石より元文二年閏十一月
廿三日新御番頭○寛保二年八月
四日死六十六歳同日戒名幻誉英

虎幣

摂津守　伊賀守　主膳正

二郎九郎

享保十年二月廿八日初見○同十七年
十二月廿八日御小納戸○元文二年直

年十二月十九日御小性○同三年九
月廿五日大猷院様より肥州唐津焼
之御茶碗数多拝見被仰付ニ付此
内別而宜敷出来之御茶碗ニ撰
為上候二付二ツ撰出差上候處同
十月五日右二ツ之内一ツ撰出之候様被仰付
られ二付撰差上ニ付其方父
主膳正義年々御側近く相勤而
時新御番頭相勤候ニ付御別段之

縫殿原ゟ四百とも御好御絵上意有
て衣紋菜硯などの御用相勤○御筆
御軽冊清書相勤○加賀守貞則
清描着相勤○同年十二月廿日
叙爵摂津守○寛保三年十一月六日
病死○寛延四年
有徳院殿薨御ニ付七月十二日一統出
合○宝暦六年四月十五日為御
悦候○同十一年八月三日御先手弓頭

明和三年五月十二日御先手被仰付
○同六年九月廿五日火附盗賊改
当分加役○同七年四月廿四日加役
御免○同年十二月廿八日日光御参
詣○安永五年四月日光御社参
ニ付御旅館ニて御燭時役三羽
織を被下○同七年八月廿四日小
普請組ニ被入○寛政元年四月十
六日死七十五歳 同寺

虎盈
初定親

右近　新九郎

享保十一年三月廿九日小次郎殿ゟ小
性ニ新ニ召出され即日
有徳院殿ニ初見ス廩米二百俵給ハる
○同十八年二月廿八日病免ス○元文
二年八月十九日死二十二歳　号中
瑞林寺葬

定昌

次郎九郎

宝暦九年十月廿一日初見ス○同十二
年九月廿八日御書院番○明和三
年十二月十五日中奥小性ニ移ル○安永
四年八月七日死四十二歳号戒行寺葬

定禮

留三郎

主殿

實田屋仙右衛門道堅二男
安永五年四月六日鮮養子○同年
八月廿二日初見○同年十二月十九日
西丸御小性組○同八年四月十六日布衣
勤○天明元年五月廿六日西丸勤○
同六年同十月廿日御本丸勤○寛
政元年同六月二日家督○同七年
三月五日小合組将追弦騎馬○同八
年十二月十日西丸勤

台徳院殿御代
○宮 菅沼
源姓 家紋 丸内ニ蘿貫 一重桔梗
高千五百二十五石
菅沼藤十郎定俊二男
定勝 新三郎
元和四年十一月采知千二百五石○
台徳院殿（寛永二年十二月廿六日）御膝下に勤仕○寛永十

年二月七日諸国大水により領地水損
ニ付一統御加増の時二百石拝領。
病免し小普請。○延宝六年十月
十七日死武州比企郡上唐子村浄
空院葬

貞業

新三郎

実久永源兵衛重之二男

定秀

下野守　新三郎　藤三郎

実同姓若狭守政憲二男

養子○延宝六年十二月廿五日
家督小普請○元禄二年四月廿九
日御小性組○享保十九年十一月廿十
九日老免し小普請寄合ニ被○延
享元年七月八日死八十歳同寺

正徳二年二月二日解斗子○享保
九年七月廿六日御書院番○同年十二
月十六日進物番○元文五年九
月廿八日御使番○同年十二月廿一日
布衣○寛保元年七月駿府御
目付八月十五日帰府御用○同二年十月七日川々御
普請御用同月十五日帰府○同三年四月十六日御
留○同年八月二日地震ニ付日光へ急御使○延享
元年十月二日家督○同三年十二月
十五日御目付○同年六月十八日
随性院殿御葬送御法事御用同
七月二日褒美時服二○同四年三
月西桔橋高石垣御修復御用掛
○褒金二枚○寛延二年七月廿七日
長崎御目付御用八月十五日御暇○
同四年二月廿五日立勤ニ付御使番
ニ而長崎奉行仰付ニ而同三月
廿八日御奉書ニ而叙爵仰付らる

宝暦七年六月朔日御勘定奉行
○同八年十二月廿三日死ス五十九歳同
寺

常憲院殿御筆
布袋御絵　一幅

同御筆
朗詠集之詩文
御詩絵　一幅

父若狭守没後常憲院様拝領二付譲請申候

定賢

新三郎　十郎　之清　多之丞
補任　膳友

実永井采女正安男

寛延元年五月廿九日継養子○同年十一月廿八日初御目見○宝暦九年三月日家督小普請○同十二年二月廿六日御小性組○明和二年十二月十四日

大坂御目付代同四年正月廿八日
御赦免○同五年正月十一日御使番○
同年十二月十八日布衣○同六年八
月六日駿府御目付○同七年五月
六日来申年日光御社参之節江代
手としてつとむへき旨仰付られ当分兼帯御目付
御用をも仰付らる○同年六月十七
日依願差免○同八年四月朔日辞
職○安永二年三月廿六日病死歳

合○同年十二月廿九日致仕○寛政
二年五月九日京都にて死六十
八歳京五條通宗仙寺に葬る

定之続

下野守　新三郎　数馬

明和四年四月廿八日初見○安永二年
十二月廿九日家督小普請○同三年
二月廿五日御小性組○同四年閏十二

月廿二日中奥御番○天明元年丑
月廿日御徒頭○同年十二月十六布
衣○同七年三月十二日御目付○寛政
元年酉四月七日安祥院殿葬送法
事御用○同年六月十四日廣敷
附役二○同年九月七日京都町奉
行○同月十二日禁裏ニ而不時御造
営御用同年十月朔日御勘定
奉行○同三年正月十五日御造営

ゝ廣敷附役三兼二役○同六年正月
十五日中宮御所御造立之御用廣敷兼
二役附役二○同九年十月十五日御
勘定奉行公事方○同年十二月廿七日
京都町奉行ゝ被改御用勤し
そのまゝ廣敷兼二役附役二○同十年
九月十五日上野ふく
浚明院殿十三回御忌御法事御用廣
敷附役二○同年十二月十四日御留守居

定休
彦三郎

東照宮御代

菅谷 本名信太 高四千五百石
紀姓 家紋 亀甲十二葉菊 同二巴 桔梗

先祖信太庄司貞頼後胤常陸國
信太郡菅谷村住居家名信太ニ称
之後高家時代松浮ニ勝貞より
菅谷ニ改貞頼より 十二代伊勢守
範宗次男

勝貞　摂津守

永正十二年八月小田氏治為名代大将
として常陸国土浦城主菅谷又次郎
古渡ニ居城を攻め捕得大利高秀より
賜感状○同十六年八月上総にて摂津
合戦時役大利高秀より御感状○
天正二年九月二日死八十二歳常陸
国神龍寺に葬

改貞　摂津守　左衛門大夫　全久入道

永禄年中越後国上杉輝虎常州
発向之時茶磨山に陣す小田之
城責落城主氏治及菅谷改貞居
城土浦之城へ氏治に従て改貞相働
小田之城を取返ー　氏治を移置
○同二年太田三楽佐竹ニ城を奪ー

常州山王堂ニ發向ス此時政貞もいさく
働合戦す此時ニ嫡子ノ菅谷彦次郎政
頼并右門尉死すと云ふ則此戦
ニ為而小田藤沢ニ在ける氏治を土
浦ノ城へ一旦移ス二ヶ年小田へ働キ藤
沢城を而巨し氏治帰城ス政貞永禄
六年落城ス此時中大藤清元小田氏
治ノ義政貞助勢し而くし先方ニ随く
若二ノ村初合戦之時手勢五百餘騎之内

数多手死負鑓をふるく戦十六人
突倒し政貞も太刀筋きりわまし
手を碎キ戦ひ敵数多ク討亡し尉
中ニ残深ゆゑく追詰治大利ほく
氏治より賜感状政貞ニ末代不断持
軍配並翁太刀 貞後 二王継光鑓 鳴田
と汲不揚○文禄元年五月二日七十
五歳ニ而く死同当つり葬

政頼 彦次郎

永禄二年三月常州山王堂合戦

討死二十二歳同寺ニ葬

大膳大夫

範政

元亀元年大内三楽真壁道夢

等常州小田ノ城ヘ乱入ノ時ヨリ同国

小部ニ於テ遠坂雅楽合戦大軍競ヒ

懸ル小田落城ニ而氏治ハ土浦ノ城ヘ

圍之同国藤沢ノ城ニテ逃去氏治

居城トシテ○天正十七年七月土浦

三楽子息梶原美濃守大将トシテ

藤沢ノ城ヘ押寄来ル中ニ忍ヒ入令

放火彼城ヲ乗取ル此時氏治ヲ

土浦ノ城ヘ引取範政ニ菅谷五百石賜

喜参餘之城ハ今度向ニ二日責戦被
城遣為捕ハ土岐常州藤澤之城ニ
立氏治於小田城之梶原ハ安房治ニ居城之
立派田忠よし而津元ニ而責戦
其後秀吉関東発向之間太閤居城ヲ
去同而高津村ニ在立右之忠臣
東照宮違　上意ハ文禄元年より範政範
員ハ父子共　石出治国見上総國同年川
村為治持方分請被治號ニ而千石領

小田氏治忠之事
東照宮御世より治之為御蔵分ニし○
慶長八年十月より為旧地之内給
常州筑波郡五千石之地深領被
寛永二年十月廿二日御判物被載
○慶長十七年八月九日五十五歳ニ而
死　常州筑波郡雄山寺より葬

紀八郎　右馬尉

範貞

年月日不詳家督○慶長五年
石田三成謀叛ニ付
台徳院殿江供大久保加賀守ニ属
眞田御陣発足上城際ニ而ク付此節文尓
本田佐渡守下知を以惣勢人数之場江
○同十九年大坂御陣之節は出之候

発足此節中途ゟ先御帰陣ニ付依而
山城守殿江御預ケ御付依而心ヲ以り拾石
飛脚ニ而京都伏見ゟ江戸　石出松と申飛脚
当ル元和元年大坂御陣五月六日御出
陣其日御供仕候
台徳院殿　上意として　松平隠岐守
ゟ京都江被遣候而御帰御陣
御預ケ被達而御供被仰付此節文ニ本
多佐渡守申合候趣有之者も被

西口京丹波之入口一城戸此番之 御
付以テ今京都可被越由申渡以間
上意難題ニ御請申上御前ニ而盃
筆無之也乃ニ上之御書之拍子方
事ニ而 御付ニ而同八日
東照宮御開陣之刻此番不城戸際ニ而
此国乃人依敷來之君ニ而之此詞ニ付○同
九日浪子（三段羅ニ）五百枚拝領○元和二年伏
見ニ而職加番○同四年死二十九歳葬

地不知

紀八郎

範重
元和四年（月日不知）家督小普請○
同九年出より寛永二年
御上洛之時此両度之時御供治此橋此つ妻
（○同年宗門改役ニ成ル返の時府庫ニ入口の御番）
○寛永九年同年之此両度御供治
橋此門番○同十一年

御上洛之御留守八町堀組入之御番
○同年九月日光御社参之節御留守一ッ橋御番
○同十六年甲州府中御城之御番○
同十七年御暇○慶安元年
大猷院殿日光御社参之時上野御番
○同二年
厳有院殿日光御社参之時上野御番
○日光御門跡之御留守上野
御番○承應元年九月廿九日二十

八十ニ而死常陸國雄山ニテ葬

政照 始範明

八郎 云清

承應元年家督 ○寛永廿年初見○同年十二月廿七日 月日不知○明暦二年
駿河加番○寛文五年兼如西國
相勤上総下総下野常陸ニテ國盗賊
御詮議之時被仰付承之下リ盗賊改
命之若干人召捕同氏元方ニ被渡

○小普請重ニ之集御用○年月日不
知高五千石之内二千五百石（改賜）弟
之五百石分八右衛門ニ分地ニ仰付○元
禄五年十二月廿一日五十四歳ニて死深
川海福寺ニ葬

改房

吉右衛門

實ハ門口桜津守入道桜山次男

（元禄二年十月廿二日初見）
年月日不知吉良子○元禄四年六月
五日死二拾三歳同寺ニ葬

兵庫　左衛門　長之助

範平

實吉右衛門（改房）ニ相続
嫡孫承祖（年月日不知初）（元禄十六年八月十二日初見）○家督継同時御礼（申上不知）
○宝永年中より享保年中まで
小普請金之集御用○享保四年寄

合○同十二年十二月廿日火事場見
廻○同十五年十二月朔日病免寄合○
同年十二月廿六日隠居○同二十年六月
朔日四十八歳にして死去鮫ヶ橋円応寺
に葬

兵庫 左衛門 紀八郎 金次郎 懸

貞寄 和政保
享保七年六月十一日初見○同十七年

十二月廿六日家督寄合○延享四年
十月十五日大坂御加番○同年十二月
十九日布衣○同五年正月十五日御役
所〻御暇○同月廿六日出立○朝鮮人〻
御饗応御用向相勤○同年七月廿九日
御城代酒井讃岐守殿御役宅ニ而遠慮
酒井信濃守町奉行久松筑後守小濱
周防守並同村織部立合にて
ニ而賞被御褒美之段被仰付○同年

同十月七日御免。同年琉球人御用
相勤。寶暦二年十一月琉球人御用
。同七年九月八日死。年四拾。同寺に
葬

政常

兵庫　大蔵　金次郎

寶暦七年十二月家督相続。同八
年二月十八日継目御礼。初て見え。明和
七年八月十六日二拾四歳にして死。同
寺に葬

政周

内匠　七之丞　紀八郎

明和七年十一月五日家督相続。
同八年三月廿四日継目御礼。安永
二年九月廿五日初て見え。寛政十年
十一月廿九日隠居

紀八郎

政知
寛政十年十一月廿八日家督

厳有院殿御代
同 菅谷
紀姓 高二千二百石
家紋 亀甲十二ノ菊
菅谷紀八郎範重次男
八右衛門
三八郎

政朝
寛文元年十二月廿七日新規分知五百石小普請〇

寛文二年月日不知御書院番○同九年
十月十四日死 下谷東岳寺へ葬

若狭守 伊豆守 伊豫守

近江守 平八郎 半右衛門

改寛

御小性組松平下総守組

實稲葉勘右衛門某二男

年月日不知或ハ寛文九年十二月

十二日家督小普請○天和元年二月
廿六日御書院番○元禄二年十二月十
五日桐間御番○同四年五月十八日御小
納戸○同五年十二月二日布衣○同九
年正月十日御加増二百石○同十年正月
十一日加秩二百石○同十二年正月十一日三
百石加秩都合高千二百石○同十
四年十二月十一日諸大夫○宝永五年
五月廿六日桐間番頭○同六年二月廿一

日寄合○正徳四年八月十五日御小姓
組に列し○享保五年十二月六日病免
寄合○同十年十二月十六日隠居し父
八郎左衛門か采地の内切米二百俵隠居料
として之を○同十五年十二月廿八日七十四
歳にして死同寺に葬る

政則

宮内

元禄九年月日不詳部屋住より召出され
御小姓組切米二百俵を賜ひ後御小姓組に
○宝永五年九月朔日二十六歳にして
死葬同寺

政輔

八郎左衛門　母は某

実は宮内政則が惣領

宝永五年十月廿七日父が部屋住たる而

元來以二百俵流式之御小普請○享保
七年五月廿九日嫡孫承祖○同十年
十二月十六日家督○同十六亥年十二月五
日御小姓組○元文元年十一月廿八日同組
与頭○延享二年九月朔日
有徳院殿西丸江御移徙之節御供○宝暦
元年六月廿日
有徳院殿薨御ニ付同年七月十二日寄合
○同年九月十九日御先手御鉄炮頭
○同二年十月十八日火付盗賊改當分
加役○同三年十二月晦日御免○同年
七月十日火付盗賊改御加役○同年九月
廿五日五十二歳ニ而死同寺ニ葬

八郎　玄清　八十郎

政峯
宝暦二年十二月二日家督小普請
○同九年正月五日西丸御書院番○

同十年六月朔日
御隠居様御附
惇信院殿　薨御以後同十一年八月二日
只今之通西丸御書院番○同十二年
十二月十六日
若君様御附○小姓組番頭之格被為永
同年八月廿一日同役ニ而致○同八年二
月廿四日
孝恭院殿　薨御ニ付同年六月十六日

唯今之通西丸御勤○天明元年
五月十八日
若君様御附○同六年九月八日
大御台様御本丸江御移同年閏十月
廿日只今之通西丸御勤○寛政二
年六月二日御本丸勤○同五年六月
廿九日五十七歳ニて死　同寺へ
葬

八十八

政徳

寛政五年九月六日家督小普請

○同十年九月廿五日吹上ニおゐて

大的　上覧時勝落願

有徳院殿御代

同　菅谷

菅原姓　高弐百俵

家紋　二重亀甲十六葉菊　九ツ丸梅鉢

菅原道真より出菅原平太丈家ゟ後流

紀伊殿家臣

政友　下市右衛門

五市右衛門　初名 一藤之助

改香

寶永二年正月廿五日右近替○正徳二年七月十八日於紀州惇信院殿御道習○享保元年御供○同五年八月廿七日二丸御小姓組○同二十年五月十六日隠居吉遊と改○元文四年九月廿六日死　歳六十　四谷龍昌寺ニ葬

新右衛門

改時

享保二十年五月十六日家督小普請○延享五年六月八日病死四十二　家門寺ニ葬

彦太郎

改明

寛延元年九月二日家督小普請○

明和六年十月十七日死ス六十五歳同寺
ニ葬

市右衛門
政清
一ツ橋殿用人
寶暦六年喜内正信次男
明和六年十二月廿七日ヨリ召○大御番小普請
○天明四年九月六日於濱御殿御庭大納
ニ上濱時被成相從○寛政二年十月廿二日
於西丸御庭大納言ニ上濱ニ及相勤相續○同四年
五月晦日大御番○同八年十二月七日白山
御殿臨大通ニ而金拾二百俵相從○同九年
二月廿六日於西丸御庭大納言ニ上濱時被成
相從○同年同七月七日死ス四十二歳同寺
ニ葬

政次　久太郎

寛政九年十月二日家督小普請

嚴有院殿御代

菅谷　初ハ重村山

源姓　高百俵

家紋　松皮菱　左藤巴　亀甲之内菊

甲斐秋山太郎光朝之支流

秋山市郎左衛門

重吉

北條家ニ仕ヘ其後浪人○寛永二年

月日不知 竹ミニ而百五西丸御書院番与力ﾆ被召出
八拾石給○同四年六月月日不知御本丸江被移候
江供○寛永二年駿府江番始当家高梨
ト改称而相勤○明暦二年月日不知本苗秋山ト改
○寛文二年六月七日大御番与力○同十二年
五月十六日死年齢不知 白銀台増上寺下屋敷
地中二在之寺ニ葬

秋山市郎左衛門

重克

寛文十一年月日不知父番代○元禄二年四月
廿五日死年齢不知 同寺葬

秋山喜左衛門

重行

元禄二年月日不知父喜左衛門代大御番与力○同
七年九月廿二日死年齢不知 同寺ﾆ葬

菅谷市右衛門

改養

實秋山市郎右衛門重克次男

元禄五年月日不知同人菅代大番与力子細不詳

母方苗字菅谷ニ改○同十五年五月日不知病氣ニ付相模公諸免門ニ追○享保

十二年正月同日死五拾二歳同寺ニ葬

重克

源右衛門

升長

土井大炊頭家来

實菅谷源太左衛門定長惣領

元禄十五年六月同日家督養子菅代

○正徳二年二月六日二條在番之時

ニ而死同拾九歳京出水千本通ニ而

長遠寺下川ニ葬

升民

忠兵衛

松平安藝守家来
実ハ堀武助ニ末次男　年月日不知養子
正徳二年閏五月日不知鉄炮四代○享保
九年十二月十五日西丸御書院与力ニ相成
○同十年十月日不知病気ニ付御奉公御免
願之通　同十八年十二月廿五日死二拾六歳
三田功運寺ニ而葬

末次郎

金助　勘

升記

実ハ長谷源左衛門升長次男
年月日不知養子○享保十年十月
十九日父番代○同十二年六月廿二日大坂
支与力○元文同年五月十二日死二拾八歳
同寺ニ葬

源助

養父

實菅谷市太郎改養二男

元文四年十二月廿八日家継として菅谷宇次郎

番代御出雲院番与力○寛保二年九月二十六日大坂

番与力○同二年七月八日於大坂死六十歳

大坂下寺町大念寺ニ葬

常右衛門

作右衛門

金右衛門

氏長

浪人

児玉作右衛門氏成次男

寛保二年十二月朔日家緒として菅谷源助

番代大御番与力○寛延元年正月廿八日

御書院番与力○寶暦九年十二月病氣ニ付

御奉公御免願之通○安永八年正月十二日

死七拾六歳三田功運寺ニ葬

孫次郎　市左衛門　源左衛門

長昌

寶暦五年十二月廿四日与力勤見習○同九年
十二月廿一日父番代○同十年十二月廿八日大
御番与力○明和六年五月十五日御書
院番与力○安永七年二月六日支配勘定
ニ而御切米百俵只今迄之通被下之高
ニ而被仰付○天明元年三月四日評定所留役
助○同六年十二月十九日留役○同八年
五月二日御代官被仰付伊豆讃岐役高五万
石高支配○寛政元年七月二日御勘定
組頭被召出御勘定仕御褒美金
二枚拝領○同四年十月廿六日下谷御
門之出火之節御持場相勤候ニ付御褒
拝領○同五年十二月十二日支配所
ニ而万石増地豊後日向国六万石余支配
○同八年五月朔日病気ニ付御役御免○同十
年四月廿四日当春病気御免

依願御用御座候者渡拾枚拝領

東照宮御代

同 菅波

源姓　高武右信

家紋　丸ノ内ニ三ツ地紙
軍配団扇

菅波刑部右衛門武周十九代

代々二本松住居

武久　権右衛門

東照宮え奉仕慶長ノ初○関ヶ原供奉○ノ[illegible]

月日不知死葬地共ニ不知

武則　又右衛門

寛永十年八月日ハ不知 松下喜兵衛○年

月日不知次男彦四郎ニ二男甚二郎

神田政敬ニ仕ヘ石高○明暦二年八月朔日死

葬地不知

武正　十郎右衛門

松原政安嫡男麦浪殿ニ仕家

武重　彦四郎

慶安四年月日不知新規ニ召出弐百

俵

常憲院殿ニ付属神田政敬小十人組

組頭○年月日不知隠居○延宝八年六

月十日死法名心行寺葬

武弘　甚二郎

武蔵国寄居麦浪徳右衛門ニ仕家

重章　助右衛門

延宝六年神田御殿ニ而右御書院番
浄徳院殿西丸ニ而御番入仕候小十人
組○御名有天和二年
浄徳院殿御逝去ニ付後元禄元年月日不知
御本丸ニ而勤定○同十一年五月御役御免
○宝永元年九月老衰隠居○同七
年正月廿八日死同寺葬

武賢　小四郎

宝永七年二月廿二日家督小普請○享
保七年十月廿三日小十人組○同十八年八月
十二日病気○同廿年七月廿四日死同寺
葬

武昌　助四郎

百人廣瀬民部組与力
實ハ山岡源太左衛門重章二男

享保廿年十月六日継子家督小普請
○元文二巳年小十人組ニ廻ル延享元年二月
十二日病免小普請○宝暦四戌年十一月廿
九日卒年五十七葬円同寺

正勝　熊五郎

百人組与力[illegible]
実ハ小普請源太左衛門重久次男

宝暦四戌年九月四日養父家督小普請
○安永八年五月廿九日隠居○寛政八
年八月十二日剃髪號楽与改名○寛政七
卯年十月廿九日卒年九十七葬円同寺

久忠　友之丞

安永八年五月廿九日家督小普請○寛
政四年九月廿五日初見○同年七月廿
二日飛驒守一件ニ付差扣○同年十二月七
日差扣赦免

国立公文書館
National Archives of Japan

久勝

正勝次男

常次郎

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan